

て峰頭に輝く様賞讃の辭なし。元宇に登る峠道千々折橋あり、穂高の麓宮川ノ池を伏瞰すべき池見橋あり、峠の絶頂は海拔約二千三百米突、午前八時三十分頂上に達す路より少しく離れて小舎あるを認む頂上より島々に降る方面も頗る急峻溪流に沿ふて下る溪流右するとき路は左に溪流左を流るゝときは路は右を行く、溪流と路と合するところは橋梁あり、故に島々に至る間十數橋あり、名を記憶せるものゝみにても本谷橋、獨活嵐橋、障子川瀬橋、中ノ澤橋、下ノ嘉魚留橋、小山ノ葵橋、瀬戸川橋、せむしばし、元治橋、梨木橋等なり。峠の頂上より一里四町にして大林區出張所あり、此所より島々へ二里三十五町餘、海拔約千六百米突、午前九時元治橋の附近にて高頭氏の草鞋切れて用を爲さず、困難を極む。午前十時十五分北澤林道左より來りて合一す、下ること五六町にして、大林區署風呂平の官舎あり、午前十一時三十分島々に達し、之れより馬車に乗じて松本に向ふ。

十三 笠ヶ岳

海拔二八九七米突(九千五百六十尺)

北緯三十六度十八分四十四秒五四二〇

東經百三十七度三十三分二秒

吾が第三回日本アルプス横断旅行は槍ヶ岳の頂を究め、僅かに飛彈の境に達せしのみ。笠ヶ岳、穂高、焼岳等を踏破するの時、日なかりしは最も遺憾とするところなり、必ず近き將來に於て素志を達し、山容を紹介すべしと雖も、今はたゞ其の概要を記述せんとす。槍ヶ岳頂上附近の山稜より右股の谷を下る五里にして、蒲田温泉に達す、頂上より三里の所に板小舎あり。此路は小島鳥水氏が飛彈方面よ

り登山の到底不可能なるを知り云々と記されたる悪路。林教授は此路を下りて朝早く温泉を出發せば日没前に槍の絶頂近きところに達すること易々たるべしと信ずと喝破せられたれども同氏の案内者は上高地温泉にて余等に向ひ右股の如き悪路再び行かずと告げたるを見れば其の悪絶は疑ひなし。

蒲田の温泉は笠ヶ岳登山者の根據地未明此地を出發せば一日にして往復することを得べし。

蒲田温泉を發し釣橋を渡りて槍ヶ岳道を後戻りすること約一里右股左股の合流點の少しく上方にて左折し右股を渡りて長崎小舎の附近を過ぎ左股に沿ふて登ること十町此所にて左股を渡りアナゲノ谷を登り之れより幾多の危険を犯し蒲田より約六時間半にして笠ヶ岳連脈の山稜に達し峰を傳ふて行くこと約一時間始めて絶頂に達することを得べし。

とを得べし。笠ヶ岳頂上の眺望は東方槍ヶ岳穂高岳の連峰にて遮らるるも西北方は能登越中より信越境上の群峰を一時に收むべく又西南は飛彈全國の山川を指點すべし其の眺望の絶大なる想像するに難からざるなり。ウエストン氏の如きは此山に再度の登山を企て其の目的を達せず第三回目にて始めて其の頂を極むることを得たりと云ふ。

十四 穂高岳

穂高の峻嶺殆んど路と稱すべし登路なきを以て最も經驗に富める案内人を率ひざるべからず。林教授は上高地温泉より岳川の溪を登れり。日本案内記には横尾谷よりの登路を記せり。上高地温泉より登るものは浴舎を出て七八町梓川を渡りて進むこと二町左折して喬

木帯中に入り、穂高岳より出づる一溪流に沿ふて登る。此附近には樹皮を削りて道しるべとなせるものあり、溪流を離るれば幽かに人跡あり、進むこと五六町にして左折し、陰鬱なる森林を出づれば急峻なる岳川の礫に出づ、此大溪は穂高の南側にある大溪なれば麓より明かに看ることを得べし、一旦此礫に出づれば殆んど頂上まで之れに沿ふて登るものなり、岳川の溪は平時全く流水なし、温泉より登ること約二時間半にして残雪を見る猶少しく登りて谷は三支となる、其儘雪上を行き或は左方の谷を行くときは殆んど登る能はざる危険の場所多ければ右折して登るべし、此附近より登路困難危険を極むるを以て詳密ならざる案内記は却て人を誤まるの恐れあり、登山者は経験ある先導に従ふの外なし、温泉より約六時間にて絶頂に達することを得べし、絶頂には一等三角點あり、附近には二個の狹隘不完全なる小屋あり、雨露を凌ぐ

に足る下山に際しては迷ふべき所多きを以て登山の際石を積み相當の目標を作り置くを要す、五時間内外にて温泉に歸着することを得べし。

有明山、燕岳、大天井、常念岳の登路案内

- 一、明科停車場より有明村宮城まで三里馬を通ず、乗馬一里二十錢。
- 二、宮城には中房温泉浴客小荷物宮城取扱所あり。
 - 中房まで 小荷物一貫目毎に十錢。
 - 中房まで 案内料三十錢。
 - 中房まで 乗籠料二圓。
- 三、宮城中房間約三里、中房川の谷に沿ふて登る、途中信濃坂に獵師の家あるのみ。

四 中房温泉は浴舎廣し。

五 中房温泉には販賣部ありて食品雜貨を鬻ぐ。

六 人夫は豫め中房温泉百瀬氏宛にて依頼し置くべし、人夫一日五十錢。

七 有明山は宮城より登りて中房温泉に下ることを得約六里と稱す。

八 中房温泉より有明山の絶頂まで約三里、五時間を要す、一合目毎に標あり。

九 中房温泉より燕岳の小舎まで七時間を要す、約四里、小舎は雨露を凌ぐ能はず、谷に下らざれば水なし。

十 燕岳の小舎より絶頂まで約一時間半にて往復することを得べし。

十一 燕岳より屏風岳の峰を渡り約二里、大天井の絶頂に達すべし、約三時間以上を費す、途中水全くなく露宿に適せるの地少なし。

十二 大天井より二ノ俣の小舎まで一時間半を費す、附近に雪あり、小舎

は十二三名宿することを得べし、稍々完全なり。

十三、二ノ俣の小舎より横尾通りを経て常念岳の頂上まで約五時間を費すべし。

十四 常念岳は山麓西穂高村より鳥川の谷に沿ふて登ることを得べし、露宿地あれども小舎は用を爲さずと云ふ。

槍ヶ岳登路案内

一、東京飯田町停車場より信州松本驛まで百二十五哩、汽車賃一圓八十

一錢(三等)

二、松本より島々まで五里、馬車にて約三時間、賃銀四十錢。

三、島々にて諸般の準備を爲すべし、人夫は一日五十錢。

四、島々より徳本峠を越えて上高地温泉まで約五里半、約六時間。

- 五、上高地には、上高地温泉株式会社（上高地温泉株式会社）の浴舎あり。
- 六、上高地浴舎より北方約一里にして、牧場管理人の小舎あり、此所より宮川ノ池へ往復約一時間、池の附近に嘉門治の小舎あり、これより約二里にして二ノ俣の溪流と梓川の源流との合點に出づ、約三時間を要す、途中横尾の小舎あり。
- 七、合流點より左方梓川の源流に沿ふて登る約一時間半にして赤澤の小舎あり、之れより約三時半にして坊主の小舎に達すべし。
- 八、坊主の小舎は八名位を宿泊せしむべし、少しく上に殺生小舎あり、四五名を容るゝに過ぎず。
- 九、坊主の小舎より頂上まで約三時間にて往復すべし。

有明山、燕岳、大天井山及び槍ヶ岳植物目録

有明山、燕岳より大天井に至る間、金山、花崗岩なるを以て所産の植物頗る饒多なり、然れども北方の日本アルプス連峰に比すれば、雪少なきを以て高山植物の種類も少なきかの觀あり、而して此附近の植物分布の狀態は、確に特色あるは、信じて疑はざるところなり、有明山附近に於て始めて得たるミヅスギの如きは、既に知られたる産地の最北のものなるべし、有明山の喬木帯は、比較的蘭科及び羊齒科に富み、燕岳附近に於けるハクサンチドリ、タテヤマキンバイ、タカネスミレ、ウラシマツ、デ等の繁殖の盛なるは、多く其の比を見ず、大天井常念附近又高山植物多し、なからず、槍ヶ岳に至りては、残雪の附近より高山植物の珍種多く、稀品、チャウノスケサウ、クモマガサ等を採集することを得べし。

水龍骨科

うさぎした

こがねわらび

みやまいたちした

いはがねせんまい しのぶかぐま ならいした
 こたにわたり おほほしよりま ひめした
 やまそてつ じうもんじした みやまうらほし
 つるでんた いはでんた べにした
 つびのねご しゝがしら つやなしゐので
 めのもとさう びじびじした とらのをしだ
 なんたいしだ しらねわらび をした
 くまわらび みやまいぬわらび ぬりとらのを
 ちやせんした

瓶蘭小草科
 なつのはなわらび はなわらび

石松科

みやまひかげのかつら すぎかつら みづすぎ
 ひかげのかつら まんねんすぎ たうげしほ

松柏科

もみ うらじろもみ あすなろ
 ころべ さはら ひのみき
 つが こめつが はひまつ
 しらびそ からまつ とうひ
 いちゐ

禾本科

すゝき かりやす よし
 やまあは みやまあはがり みやまこめすゝき
 おほあはらすゝき みやまあは みやまいちすゝき

うしのけごさ
ねまがりだけ

おほうしのけごさ

さがや

莎草科

あぶらしほ

みやまなるこすげ

あぶらがや

みやまくろすげ

かはすげ

えぞのあぶらがや

たぬきらん

いときんすげ

燈心草科

すゝめのひえ

たかねあ

みやまあ

みやまくろほし

いとあ

かうがいせきせう

ひらほのおうがいせきせう

百合科

さゝゆり

みつぎほうし

いはまほうし

こほいけいさう

つくほねさう

こおにゆり

ちしまあまな

きほなのあまな

ゆまき

くるまゆり

うほゆり

のぎらん

つほめおもと

くるまほつくほね

あきやぎさう

まひづるさう

たまがほとぎす

えんれいさう

たけしまらん

蘭科

じんはいさう

ひめみやまうづら

みやまふたほらん

みやまもじづり

はくさんちどり

はよはうちどり

のびねちどり

さいはいらん

あさちどり

いちえうらん

みやまうづら

しゆすらん

あけほのしゆすらん

ちどりさう

胡桃科

さばぐるみ

楊柳科

いはやなぎ

やまならし

てろ

樺木科

やまはんのみ

しらかんば

さうしかんば

みやまはんのみ

だけかんば

つのはしほみ

藪斗科

おほなら

なら

おなのき

いぬぶな

檜科

はるにれ

蕁麻科

うはくみさう

ららんせ

みやまららんせ

ほぞほのいらんせ

むかいららんせ

檀香科

つくほね

馬兜鈴科

うすほさいしん

薯科

いぶまどらのき

むかどらのき

うらじろたて

じんえうすいは

すいは

おほいたどり

石竹科

ふしぐろせんろう

みやまみやなぐさ

いはつゆんせ

たかねつめくさ ほんほのつめくさ なんぼんはこぶ
かはらなてしこ たかねなてしこ

木蘭科

こぶし ほくのき

雲葉科

かつら

毛茛科

やまとりかぶと しらねあふひ れいじんさう
みやまはんせうづる やまおだまき きけんしようま
みやまきんぼうげ あまからまつ もみぢからまつ
ほたんづる ひめいちげさう はくさんいちげ
はいくわうれん みつはわうれん こかひうわうれん

うめぼちも

木道科

あけび みつほあけび

小蘗科

とりとまらず さんかえう いかりさう

罌粟科

こまくさ きけまん

十字花科

ふじはたぎほ みやまはたぎほ みやまなづな
みやまがらし みやまたねつけほな おほはたねつけほな
みやましろういぬなづな えぞはたぎほ

茅膏菜科

もうせんごけ

景天科

みやまゝんねんどさ べんけいさう

まりんさう

みつばべんけいさう

虎耳草科

しこたんさう

くもまどさ

くろくもさう

だいもんじさう

しらびげさう

うめはちさう

こまがたけすどり

やぶるまさう

あらしどさ

つたやくし

とりあしよさう

薔薇科

しむつけさう

みやまだいこんさう なつゆきさう

いはきんはい

たかねなゝかまど

ちやうのすけさう

荳科

いはわうぎ

もめんづる

猪牛兒科

ふうろさう(紅花)

はくさんふうろ

たちふうろ

酢漿草科

みやまかたはみ

かたはみ

遠志科

ひめはぎ

ちんぐるま

みやまきんはい

べにはないさう

たてやまきんはい

こがねいさご

こかえういさご

あづきなし

たかねはら

うはみづきら

こほのふゆいさご

大戟科

たかとうだい

なつとうだい

岩高蘭科

がんかうらん

漆空木科

どくろづき

衛矛科

にしき

まゆみ

こまゆみ

つりはな

省活油科

みつぼうづき

楸樹科

七葉樹科

とちのき

みねかへて
いたやかへて

うりはたかへて
おがらはな

こはうちはかへて

鳳仙花科

つりふねさう

まつりふね

嶺李科

くまやなぎ

葡萄科

やまぶたう

獼猴桃科

またゝび

しちくさづる

旌節花科

きふじ

金糸桃科

おとぎりさう

こおとぎり

薔菜科

きはなのこまのつめ たかねすみれ

みやますみれ

こみやますみれ おほほますみれ

千屈菜科

みそはぎ

柳葉菜科

やなぎさう

みづたまさう

みやまたにたて

いはあかほな

ひめあかほな

五加科

みやまうこぎ

はりづき

こしあぶら

繖形科

たうき

のだけ

しんどう

しらねにんじん

はくさんほうふう

山菜萁科

こぜんたちほな

やまほらし

令法科

りやうぶ

鹿蹄草科

いちやんさう

こいちやんさう

うめがたんさう

しやんじやうさう

石南科

つがぎくら

あきのつがぎくら

こめはつがぎくら

ほつとぎ

みねざわら

くろまめのき

しらたまのき

あかもの

うらしまつとぎ

こけもく

いはひげ

しやくなげ

しろはなしやくなげ

きはなのしやくなげ

ぢむかて

岩梅科

いはうちば

いはかのみ

こほのいはかのみ

いはちめ

櫻草科

つまつりさう

おかとらのき

木犀科

いほたのき

龍膽科

おやまりんだう

みやまりんだう

たうやくりんだう

こけりんだう

みやまあげほのさう

つるりんだう

紫草科

みやまむらさき

唇形科

たてやまうつほごさ

しろね

いぶまじやかうさう

みそかはさう

しやかうさう

玄荖科

みやまくわがた

ひめくわがた

はひくわがた

くがいさう

こくめごさ

ゆきわりしほがま

列當科

よつほしほがま

茜草科

なはんげせ

敗醬科

まはなのかはらまつほ

山蘿蔔科

かはらまつほ

桔梗科

はくさんさみなし

さみなし

みやまのこな

くるまはたう

きとこし

まつむしさう

いばまのやう

ひめしやじん

ちしほまのやう

つりがねにんじん

ま

や

菊科

たかねよもぎ

かうぞりな

にがな

たけぶき

えぞむかしよもぎ

かにかうもり

おとこよもぎ

やまのこざりさう

みやまかうぞりな

さばぎく

よぶすまさう

やまあきみ

やぶれがさ

あまのまりんさう

おたからかう

ふき

ひよどりほな

あじあきみ

くるまはたう

浅間山

烏嶺

海拔二千四百九十三米突除(八千二百二十七尺餘)

北緯三十六度二十三分五十五秒八八八六
東經百三十八度三十分五十九秒四五六二

信濃路や見つゝわがこし淺間山

宗良親王

雲は煙のすそめなりけり

信濃なる淺間がたけに立つ煙

在原業平

をちちち人の見やはとがめん

一望無限の關東平野平凡無趣味。

汽車高崎に來りて先づ仰ぐ上毛の三山遙かに望み赤城の翠微大麓長

く引くところ前橋の市街あり其の彼方に遠く淡きこと夢にも似たる

は幾度か踏破せし日光白根。

赤城の左に聳ゆる榛名の群峰榛名富士掃部嶽鳥帽子嶽等皆車窓にあ

り。榛名の左方妙義の嶮岫。雄大なる日本アルプスの諸峰に比しては其の規模小餘りに箱庭的なれども奇岩怪石さすがに天工の妙を極む。金洞金鶏兩山の中間に聳ゆる蠟燭岩これ奇の極怪の極關東平野の平凡に厭きたる身には始めて渴者が水を得たるの思あり。碓氷の峠。アプト式軌道を上る汽笛怪音を發して耳底を穿ち、一きは車軀の動搖を感すれども進むこと遅々たり。峰高く谷深く雪によろしく紅葉に名あり。白雲空湧風氣搖曳自ら塵寰を脱して仙境に入るの思あり。谷底遙かに碓氷の舊道を挟みて逶迤たる坂本の破驛を見るとき我に一種の感慨なきこと能はず。碓氷峠上り盡せば信濃の高原。關東の平野新緑煙るとき未だ白雪を見る都門燦金の炎暑に困む時こゝに萬古の涼風あり。荒涼蕭殺たる

燒野原草は短かく花瘦せたり、淺間の大嶺蒼穹に峙ち、根方に擴がる無限の曠野、我は覺えず叫ぶ。
大陸的……大陸的。

二

碓氷の西第二驛御代田にて車を下る。先づ眼に入るものは、益々廣き淺間の荒野と蕭殺たる一短亭と、大道髪みちのけの如き中仙道岩村田より來り、東方一里にして追分に達す。
信州方面より淺間に登るに四道あり。
一は御代田より直に追分に達し、之れより登るものなり。御代田追分間約一里の間は路平坦なりと雖も、一帶に燒野原、土地礫礫一面の草原をなす、夏秋の交花最も多し、我曾て二三の人々と此荒野に路を失し、千草の花の咲き亂れたる間を滿身に夕陽を浴びて、彼方此方と彷徨せし

とき、紫なる山羅、黄なるユフスゲ、紅き河原撫子の花の色いかに美しかりしよ。かゝる美しき野もあるものを、我等しきりに塵界に通ずる路を求むることのおかしさよ。
追分は中仙道の要衝。曾ては賑盛なりしも、信越線の鐵路通ぜし以來には、かに一荒村とはなりぬ。
嗚呼、風情多き古驛……風情多き追分驛。
庇長く檐傾きたる大夏、荒涼寂寞たる國道を挟みて立てるところ、何處にか古の面影を求むべき。力も抜けし老媪が日影温かき椽先に瘦せたる猫と共に昔の榮華を夢見る様、我が胸裏に得も言はれぬ旅情起る。
昔ながらに噴毒の焰止ひとさもなき淺間の大嶺。
荒涼なる彼の曠原寂寞たる此破驛、歌ふべく又畫くべし、たゞ多情なる遊子、獨り潜然として涙下る。

登山路は追分驛の一端古祠淺間神社の後を過ぎ、赤瀑を經而して頂上に達するもの距離近しと雖も其の峻亦最たり。
 第二は御代田より鹽野を經て直に頂上に上るもの。第三は小諸驛より上るもの。兩者共に路稍々遠しと雖も途中峻道なし。
 以上三路の外輕井澤より沓掛驛に出で北行一里半小淺間の麓に達し、西向山頂に達する路あり。
 幾度か各路を上下せしも、御代田より上りて小諸に降るもの勞最も少なきを覺ゆ。

三

早朝上野驛を發せば、半日にして御代田驛に達す。即日登山するは、困難なるを以て停車場より直に鹽野なる眞樂寺に至り宿泊すべし、道程一里と稱す。吾れ始めて暗夜此寺に至りて宿泊せしとき、光景今も

猶目前にあり。老杉古松森々たるところ一字の巨剎あり、雜僧に導かれて塵多く小暗き廻廊を辿りて、奥まりたる一室に至りしとき、何となく氣味悪しく冷かなる空氣の肌に觸れしとき、忽ち腦裏に浮びしは、夕な夕な温かき母の懷にありて、御伽話に聞きし山寺……山寺いと寂しく物懐き古寺はこれ。

此小暗き廻廊夜なく、碧燐のもゆるなきか、白髮の老媪茶を汲みて來りしとき、怪猫其の後より來り、老媪の黒き齒と背く圓なる猫の目玉、余は悚然として覺えず戰慄せり。
 此眞樂寺は淺間登山者の常に宿泊するところ。登山の客皆燒野原日中の炎暑を避け、夜陰を犯して登り、未明山頂に達し、御來迎を拜すと稱し、頂上日出の大觀に接し、噴火口を探り直に下山するなり、斯くするときは即日歸京することを得べし。

眞樂寺より約半里程岐路多くして迷ひ易し即ち寺の小廨を履ひ燭を
 乗りて先導せしむべし。
 一徑綫の如く茂林の中に穿ち入れば四顧寂寥一草戰がず一枝動かず
 只脚下に落葉の婆娑たるを聞のみ冷然水の如き山氣を浴びて前人後
 者一語なく蕭として登り行く林中に遙かに遠く豆の如き柵屋の燈火
 を認めしとき吾に一片の詩情起る。
 小廨に別れて進めば時に右か左と惑ふところなきにあらねど小廨が
 懇切に指示せし方を進めば足趾益々仰ぐ。
 有名なる鹽野の殖林地を出づれば雑木林まばらになりて地は一面に
 爛砂にあらざれば燒石草鞋忽ち摩滅す山の七八合目頃ともならば山
 氣身に沁して堪え難く枯枝落葉を拾ふて火を焚き暖を取るにあらざ
 れば一步も進む能はざるべし。盛なる焚火に身うち漸く暖を覺ゆれ



ば、睡魔忽ち襲來す。

頂上を仰ぐに幽かに微紅を認む、之れ噴火口底の灼熱せる熔岩の光噴
烟に映ずるなり、時に何物か面を打つあり、霧か霧にあらず、雨か雨にも
あらず、之れ火口より來れる火山灰なり。

入合目程の處に不動清水と稱するあり、之れより以上に全く飲料水な
し、こゝより漸く草木少なく木振りおかしき唐松多し、クロマメノキ淺
間特産など、里人の稱する甘露梅あり、これコケモ、とて高山普通の
植物なり。

登路著しく急峻となり、爛砂燒石滾々として走り、寸進尺退容易に進む
能はず、漸くにして最高所に達すれば、之れ前掛山と稱する、舊火口壁に
て、一小谷を隔て、彼方火口丘より噴烟するを見る。

夜十二時眞樂寺を發すれば、未明此地に達することを得べし。前掛山

の最高點三角標の附近に蹲踞して日出を見る、壯觀を極む、山腰を繞る、朝靄漸く消ゆれば、緑なる裾野、紫なる平林、吾が來し方を顧みるに、闇を辿りて遙けくも來つるものかな、鹽野の官林、遠く茫漠として、碧落に連なる。

四

現時の淺間火口丘は第三次の噴出にかゝるものにして、前掛山こそ第二次の噴火口壁なることは、其の地勢と岩壁の層理とによりて容易に知ることを得べし、而して第一次の舊噴火口の殘趾は、牙山こそ之れ。此附近の岩石は一般に輝石富士岩なり、之れ淺間山脈を構成せるもの、往々橄欖石及鱗石英を含む、新らしき噴出物中には、流紋岩質凝灰岩の變質して生じたる薑青石を含むを見るべし、有名なる淺間の薑青石之れなり。爛砂の間に人跡を認め、西南方より噴火口の附近に至れば、大

坑深く地心に通じ、口徑約一千尺、炎焰底に燃え立ち、白煙濛々、天に昇り、硫氣鼻を衝く、坑底轟々、遠雷を聞くが如し。西方火口壁の一部、罅裂せるところあり、銚子の口と稱し、硫煙少なきとき、此所より坑底を俯瞰すれば、熔岩の灼爍たるを見ることを得べし、其の色紫金色……否一種云ふべからざる、悽愴の色紫金色……紫金色なる簡單なる三字、いかにか此恐ろしき熔岩の色を形容することを得んや。もし、よしや其の色を形容すべき文字ありとも、蓋爾として、蟲の如くはかなき吾人が、此火口壁に立ち、自然の威徳の前にひれ伏すときの感情は、之れを表白するに由なけん、彼の煩悶の子等死を決して、此所に來るも、此恐ろしき光景を、一見せば、必ずや眼を掩ふて走らん。淺間の噴煙は、或は多く、或は少なし。少なきときは、坑底を窺ふべく、多きときは、近づくべからず。三十七年の夏なりき、二三の人々と共に、爰

に來り、余は火口を背にして附近の撮影に餘念なかりしに消魂しき叫聲何事ぞと顧みれば、暗燻たる怪烟天を衝きて直上すること三千里、一同之れを見て走れり、余も周章其の後に從ふ、何等の愚、何等の痴、淺間の火口爆發せば如何、吾人が……數歩……數百歩……數千歩を走るとも其の甲斐やなからむ。汝の伯兄ベスピヤスは曾てポンペイ、ヘルクラネウムの兩市を踏み潰せしも、無能なる淺間は未だ末世の溷濁を燒燼せず、天下の醜類を掃蕩するの快舉に出でず。

五

火口壁を一周し、其の西北方に至り上州方面を一瞥すべし、驚くべき熔岩流、蕩々として山麓に走れること數里、其の色黝黒、湧沸奔騰せしすまじき有様、恰も黒色なる狂瀾怒濤の化石せしかを疑はしむ、之れ天明

三年の噴出にかゝるものなり。嗚呼、當時の慘狀いかに思ひやるだに、肌之寒さを覺ゆ。黒烟天に漲り、天地晦冥、砂を降らし石を飛ばし、山麓鳴動、電光閃めくとき、噴火口より灼熱せる溶岩迸發して路に當る何物をも燒き盡し、吾妻川の谷に降りしときは、世界の末期、女禍氏ありと雖も如何ともすべからざるべしと思はれしならん。

天明三年噴火の記事は、天明信上變異記、信濃國淺間岳の記等に見えたり。池田某が當時の光景を寫生せしと云ふ繪を見しに、當時の有様を想像するに足るものあり、又之れに附記せし説明は、文簡なれども要を得たり。即ち

一、天明三癸卯年五月廿六日巳刻半雷の如く鳴り渡り、黒烟雲の峰の如く高く吹き上げて、直ちに山より東の方へ折れて、鼻田峠、鎌原村六里ヶ原、碓氷山、横き東に横たはり、見渡し數十里、午の刻過ぎて、烟半ばとなり、鳴も靜まる、然れどもこれより日夜煙り太く絶えず出たり

一、全六月廿六日明六つより鳴る事石臼の如く地ひびきして聞ゆ只鳴り響くばかり

一、全廿七日申刻程に鳴り渡り煙太く空を覆へり暮方半分になる

一、全廿八日も全刻鳴出し煙太く吹き上げ空を覆ふ其の頃雨しげく折々山をかくす晴間に見えたり

一、七月朔日申の刻より大に鳴り煙太く数千丈吹き上げ暮合より静まる

一、全二日全刻吹き上げ暮れて静まる此時六里ヶ原へ砂石降る

一、全五日夜亥の刻斗り鳴出し子の刻頃山上皆火炎燄の中石散る音に驚き寐たる者皆起きて眺む電光すさまじく戸障子に映る煙は東へ横たはり丑の刻過ぎて鳴静まりぬ此夜松井田坂本へ小石降る

一、全六日の未の刻大に鳴り渡り煙吹き上げ突上げ押巻りく数千丈高く天を覆ひ電光火打ちの如く飛び散る中より露も火燄すさまじく鳴動し次第く強く焼け上り山山火の如く雲中火玉四方八面へ飛び散る大石小石煙の中より迸りし山の腰數萬の松明燄火の如く戸障子地震の如く鳴りはためき煙東へ横たはり西の方牙山の方は大石小石煙の中より飛び散る

一、全八日は數萬の雷神一度に落ちかゝるや地のそこより天にひびきひしり

しと鳴り渡り電光すの聞もなく煙空を覆ひひろがり東方隈の如くなる中に鳴神電光すさまじく魂を失ふばかりなり

一、鹽名田南臺にて見れば七月八日の朝は煙空高くのぼりて鹽名田宿の上へ覆ひかゝる如く見えたり

一、淺間焼け崩れたるは四ツ時頃と云ふ泥石吹上げて上州吾妻郡鎌原村を始めとし吾妻川筋五十八ヶ村を押し流す

噴火口より少しく西方に降るときは爛砂の間幽かに人跡を認むべし行くこと少許淺間の小祠あり。淺間の祠より焼石の間明かに降路を認むべし岩石磊々路頗る峻を極む附近悉く焼石爛砂殆んど一草の青さを見ず。

頂上より降ること廿町湯の平に至る所謂火口原なり。此地は前掛山と黒班山との中間に介在す少しく降りしところに源平清水ありこれより溪流に沿ふて長坂を下る。溪水悉く黄色硫臭紛々たる

り溪流は濁川の源にして所謂火口瀨なり。
長坂よりは牙山と黒班山との左右に仰ぐ。危岩起伏怪石縦横互に其
の奇を争ふ此附近紅葉の景美觀比すべきものなし。
二ノ鳥居を経て一ノ鳥居に達す頂上より約一里十町と稱す。猶ほ下
ること廿七町許り右方に七尋石あり七尋石より小諸町まで約一里一
ノ鳥居以下は風景平凡又記すべきものなし。

戸隠山及び飯綱山

鳥嶺

戸隠山は長野市を距る西北五里の處にあり、一名高御座山の稱あり。

詠藻に
うごきなき高御座山祈りあきつ
俊成
の句あり。戸隠の奥山と稱する高妻山は海拔實に二千四百二十五米
突あり神代の昔手力雄命が天磐戸を隠せしもの故に戸隠山と呼ぶと
は世俗の傳説。餘吾將軍維茂が鬼女紅葉を討ちし舊話は人口に膾炙
するところ山麓今も鬼無里の村名あり。
山勢の峻嶮なること本邦の諸高山中比類少なし。戸隠山彙中西嶽の
連峰の如きは古來人跡至らず屢々登山を企てたるものあれども克く
其の目的を達せしもの少なし表山よりは深谷を隔て、呼べば將さに
應んとする位置にありながら山中の地勢全く秘密の中にある。
表山に於ける蟻の戸渡の峻奥山に於ける無間の谷の幽邃は皆人の知

れるところ、然れども世人が多く此山を噴々する所以の者は、歴史的傳説あるが故にあらず、山勢の雄俊なるが故にもあらず、蟻の戸渡無間の谷あるが爲めにもあざること勿論なり。實に戸隠山は本邦諸高山植物の産豊富なるが故なり。

午前六時上野停車場を發せば、瀧車は大宮高崎等の各驛を經、碓氷峠の隧道、明暗二十有六回、正午輕井澤驛に達すべし。驛は海拔三千尺、筑波の山嶺と高さを等うすとかや、五月始めて梅花綻び、九月既に霜を見る、仰げば靈峰淺間白鳳の昔より烟天を焦せり。

小諸上田の各驛を經、午後二時半長野に下車せば、一泊して登山の準備をなすべし。古間の銘酒は都人士の口に適せざるも、更科の蕎麥天下に名あり、珠數つまぐり後生を願ふ、媼翁にあらずとも、一度は善光寺に賽すべし。善光寺境内の西北隅より直に横澤町に出て、僅に北上して

左折し、戸隠路を進むこと三町許にして、鹽澤鑛泉附近に達すべし、之れより山路稍々峻嶮車を通ぜず。山は一面に山骨を露出し、満山松樹を見るのみ、颯々たる松風は潺々たる溪流に和す、山道迂餘曲折せるを以て七曲と呼ぶ、峻坂二十餘町許り、此坂を上れば、戸隠奥社に至るまで又峻坂を見ず。

七曲の長坂登り盡せば、前面の眼界頓に廣く、西北にあたりて終歲雪を戴ける雄大壯麗なる日本アルプス連峰の一部を望むべし。荒安に至れば、路傍に茶亭あり、一碗の澁茶に渴を醫すべし、葛山旭山等長野にて仰ぎ見し山々、其の頂皆眼下にあり。之れより仁王坂に至る間、路傍にゲンジスミレ等の高地性植物を産す、又附近の喬木にヤドリギ多し。

ホザキノヤドリギの如きは稍々珍とすべし、本種は長野附近にありても之れを見ること、あれども之を普通のヤドリギに比すれば、相違せる

點渺なからず莖は木質をなして長さ三尺位に達するものあり葉は普通通のヤドリギよりも狭少肉薄し秋季に至り落葉す花は總狀をなし白色小形果實は橢圓形をなし熟すれば黄色を呈す秋末落葉せる後數百千の黄類さながら珠玉を貫けるにも似て美觀を呈す寄主は多くナラの類なり。

荒安より約半里許も來たらんと思ふ頃路又坂路となる路傍右側に一基の石標あり頗る古色を帯ぶ碑面に右ざいがうみち左とがくしみちの二句を刻せり右ざいがうみちなる一句何ぞ詩的なる仁王坂附近又植物多し。

二

仁王坂を登り盡して將さに飯網原に入らんとするところに茅屋あり、媼翁常に行人の爲めに苦茗をすしむ。

飯網原は植物採集地として其の種類多きこと比類渺し一般の模様や日光中禪寺より湯本に通ずる間なる戰場ヶ原に似たり然れども彼の如く一面低平なる野地にあらず戰場ヶ原は屢々採集を試みし地湯本に向ふ路の左方は多濕の野地にして植物の種類に富めども右方は一般に乾燥せる平原好採集地と稱すべからず特に男鉢山の裾より太郎山の裾に亘り一面に熊笹生ひ茂りて殆んど歩行すべからず余は此中に入りて終日困苦を極め全く何物をも得ざりしことありき。

飯網原は原とは云へど低平なる戰場ヶ原とは大に其の趣を異にし丘陵起伏して高低一様ならず地勢頗る變化に富む。高所は一般に乾燥せるを以て植物の種類乏しく低窪の地は一面に沮洳の野地をなし植物の種類多し。

飯網原に入りて進むこと三四町路の左右に二大池あり。右方の者は

水深く附近ミズガシハ、ミツバセウ、エンコウサウ等最も多し、ミツガシハは之れを採りて水盤に移さば實に螺鈿の椀棚を飾るに足る自生地
 にありては老なる根莖縦横其の根深さを以て採集容易ならず。ミ
 ツバセウに至りては其の根の深きことミツガシハの比にあらず其の
 葉の長大なるは一米突にも達すべし其の花の奇形なるが爲めに之れ
 を採集せんとするも其の根の深きに驚かざるものなし。エンコウサ
 ウが原頭紫水のほとりに黄花を満開せる様其の美云はん方なし。近
 來人に知られて名高きは此附近に最も多きミアフギアヤメなり花は
 アヤメの如くにして葉はミアフギに似たり。
 左方の池には水面の略半を蔽へる浮島あり水準の上下するに従つて
 上下し淋雨の候池水漫々たる時は高く水上に浮び夏季下流の水田
 に灌溉するが爲めに池水涸渇するときは池底に膠着す此際觀察すれ

ば島の全体は六七尺より一丈内外なる泥炭質の厚層なり里人の言に
 よれば此浮島は風に従つて浮遊すと稱すれどもいかゞにや此浮島に
 は種々の植物多し此池畔より南方遙かに富岳を望むべし。
 進むこと三町許にして一面低平なる野地あり此附近より飯綱山に登
 るべし。平野の間樵路錯綜せるを以て案内者なくば登路を見出すこ
 と困難ならん。飯綱山は標高六千二百二十四尺山容略圓錐形をなし
 一見其の火山なることを認むることを得べしと雖も永く噴出の跡を
 絶ちしを以て今は噴火口の趾を認むること能はず、釜山、複輝石、富士岩
 より構成せらる。
 山頂に飯綱神社あり延喜式内皇足穂命神社奥社の鎮座地なり。高山
 植物の種類乏しからず特に各種の蘭科植物に富めり。
 登山路は狭少なれども一の難所なく高地に特有なる雑草路を埋めて

吾人を難ますことなし、裾野に於て路を陥み迷ふことなくば、登山最も容易なり、長野より頂上まで一日に往復することを得べし。

飯綱神社は所謂飯綱山の最高峰にあり。其の東の一峯を靈仙寺山と云ひ北にあるを天狗嶽と呼ぶ。山頂は一面に丈け短かき根曲り竹の繁茂せるを見る、又不思議なる菌類の一種あり、豊田庸園の飯綱山紀行に左の記事あり。

さて頂より五丁程東北へ根笹を分け行くに沼田の畔の如く土和かなり小岩班なる砂原の根笹なきところあり上面の砂を掻き除けて岩の際を手にて七ひ出せば、参飯の如く粟飯の如し探つて服するに和かにして何の香氣なく風味とてもなし腹に充つるも嗜りなしと云ふこの砂みだりに採りて下らんこと山神の惜み給ふと云ひ傳ふざるを少しばかり土産にせんことを社司に乞ふ社司其の詫言を唱へて一握を授く故郷へ歸り一夜水に浸し置けば又和かになれり人々に味はしめしに皆々奇異の思ひをなし侍りぬ實に乾坤の間に斯る不思議の外にもありや未だ聞かず思想ふうべし飯砂



の名に負ふるかも世に書き傳ふる飯綱の文字あたらず飯砂なるべし云々
 此飯砂こそ一種の菌類にして黒姫山にもあり俗に天狗の麥飯と稱す
 るものなり分類學上所屬不明の種類とす。

飯綱山にて採集することを得る蘭科植物は、テガタチドリ、ツレサギサ
 ウ、ハクサンチドリ、アツモリサウ、キバナノアツモリサウ、ニヨホウチド
 リ、ウチヨウラン等主なるものとす。ギハナノアツモリサウ、ニヨホウ
 チドリは山草家の最も珍重するところのものなり。キバナノアツモ
 リサウの繁殖せる附近にタヤマウツボグサ多し、性强健花頗る美園
 養の價値あり。

飯綱山を越えて直に戸隠に下る路あり途中の坂路は山道としては最
 も容易なるものなり約一里半にして戸隠中社の入口に達すべし。
 長野より戸隠に向ふ途中一度飯綱に登らば此路によりて直に戸隠中

社に下るを順路とすれども若し夫れ飯網に登らずして戸隠街道を進まんか飯網原の草原敷町にして將さにつきんとするところに戸隠一ノ鳥居あり四近の眺望絶佳にして何人も此所に足を駐めざるなし北方に高妻山の峰巒を仰げば神先づ踊る。

此附近一帯にスラン(君影草)多しこの有名なる谷間の姫百合は何人も熟知せるところのもの坊間亦容易に得らるゝものなり淺間の裾野八ヶ岳の裾野等多數に本種を産す性強健容易に枯死せず又克く開花す其の花の高潔なる其の香の馥郁たるさすがに英國人が國粹の精華として愛好するも理なることにこそ。本邦野生の種類は其の花形洋種の如く大ならざれば外見彼れに一步を譲ると雖も其の清香はるかに彼に勝る數種を瓦葺に植えて机邊に置かば一室爲めに香ばしさを

三

一ノ鳥居より中社まで五十三町一町毎に石標あり。進むこと八町許りにして大窪に達す路傍に茶店二軒あり戸隠參詣者唯一の休憩所たり一ノ鳥居より二十八町にして路二岐となる。左方は寶光社右方は中社に達するものなり。寶光社中社奥社之れを戸隠の三社と稱す三社に賽せんとするものは左方の支路を進み十七八町にして寶光社に達し夫れより十二町にして中社に至り奥社に行くを順路とす然れども戸隠登山者は之れより直に中社に入るを常とす。

中社は戸數々十戸舊宿坊二十戸許り何れも登山者の爲めに宿泊に便す就中勸進院久山家は舊別當職にして城内廣く屋宇宏壯吾等登山者の爲めに歡待至らざるなし。

中社の殿堂は老杉の森々たる間にあり古撰惇素神さびたるを覺ゆ。

中社より三十町にして奥社に達すべし。中社より奥社路を進むこと三町許りにして右方に野地あり植物多し。ミツバセウの白苞は群鶴の遊べるが如く、ミヅガシハの白花残んの雪かと疑はる、エンコウサウの黄葩は之れ黄金の華か、紅甍を敷けるが如き日露草、サハランの如きも珍とすべし、水苔の一面に繁殖せる間に野地杉蘭の稀品を見る。

野地を出て、再び奥社路を進めば、路傍に釋長明の墓あり。此附近を午王峰と呼ぶ、孝子兒の塔あり。奥社の華表ある附近より喬木帯に入る、猶ほ進むこと數町にして古色蒼然たる隨神門あり、之れより老杉道を挟み天日を蔽ふ。

昔は勸法院以下十餘坊皆此地にありしも、現今は悉く皆中社に移りしを以て、今は唯腐葉深きところに斷礎を見るのみ。タチカメバサウの可憐なる小白花は行く人の袂を引き、名の仔細ありげにて一顧の價値

なきヅタヤクシ、大葉小傘の如きヤグルマサウ等多し。

老杉將さに盡んとして路少しく坂路をなす、小坂登り盡せばこゝに奥社あり、手力雄命を祀る、堂宇中社に比すれば小なりと雖も、白雲常に徠し清泉遠く流るゝところ、全く俗塵を絶ち身心と共に聖なり。

表山に登るには、社務所内を通過して屋後より喬木森々たる間を登るべし。亭々たる老幹蒼穹を摩し、枯葉深く細徑を没し、登路急峻を極む。此附近喬木と云はず、灌木と云はず、樹膚樹梢一面に地衣類の着生多く、實に完膚なしと云ふべし。ヨロヒゴケ、カプトゴケ等の巨大なる葉狀地衣あり。サルオガセの樹梢にかゝれる様實に深山の趣きあり。キ

ンセンサウチンキは本種より採るとかや、ウメノキゴケ屬クラドニア屬の地衣類多し。固着地衣に至りては名も知れざる種類甚だ多し、一々精査せば數十百種にも達すべし。喬木の下残雪全く消えざるとき、

其の傍らにシラチアフヒの満開せるを見るときは何人も低徊去る能はざるべし。

登ること約十町許にして遠棚と稱する岩窟あり其の右方は一面の障壁岩面に有名なるヒメクモマガサあり。青嶂巖崖削るが如き岩壁に、此可憐なる小草が一撮土を握つて開花せる様、いかに心なき採集者も之れを摘み去るに忍びざるべし。

遠棚の左方を進めば所謂百間長屋と稱する一大障壁高さ幾百千尺神劍鬼斧の痕吾人をして轉た天工の偉大を歎稱せしむ。此百間長屋の岩壁こそ昔は岩面皆虫捕董を以て點綴せられたるも今は全く其の片影をも見ること能はず高山植物濫獲の盛なる吾人をして悚然たらしむ此附近は六月中旬まで残雪あり、ガクアデサ井の野生を見る、戸隠のフロラを記述するの際特筆すべきものなり。路益々急を加ふ、右方の

岩壁に西窟あり、里人は秋田三尺坊線行の地と稱す、鐵鎖に縋りて登ることを得べし。

戸隠表山一帯の山骨は、全部集塊岩より成れり、元來集塊岩の物たる塊片相集積して生ぜしもの、且つ成生の時代新らしきが故に、氣中に露出曝露せるところ、氣水の爲めに風化霏爛次第に破壊し、爰に峻峻極まりなき山塊を爲せるなり、故に幾多の障壁石窟を生ぜり、石窟の如き戸隠三十三窟の名あり。即ち曰く、

本窟、東窟、中窟、西窟、大岩殿、獅子窟、象窟、虚空藏、愛染窟、不動窟、降三世窟、軍荼利窟、威徳窟、金剛窟、毘沙門窟、帝釋窟、辨才天窟、經藏窟、妙法窟、般若窟、智恵窟、歡喜窟、仙人窟、龍窟、鷲窟、金窟、五色窟、三層窟、日中窟、大股窟、小股窟、長岩窟、大多利窟、百間長屋附近より急峻なる斜面、草莖に縋り、蝸附して登る七八町、キバナノアツモリサウを産す、之れ又濫獲の結果、絶滅に歸せんとす、嗚呼、如何に精緻天工を奪ふの美術品も、曾て人の手に依りて製出せられしもの

の再び吾人の手に依りて作られざるの理なし、しかも天下の人は之れを國寶として保存するの必要を認め、れども未だ斯の高山植物の保護すべきを悟らず、斯の花一度絶滅せば、再び何人の手によりて之れを作らんとするか、世の濫獲者流、想はざるべからず。幾度か危険を犯し、三四町にして頂上に達せんとする所に至れば、蟻の戸渡りの峻あり、左右は直下幾千仞、殆んど其の谷底を見ること能はず。吾人は今此峻を渡らざるべからず、白雲脚下に揺曳し、さながら天の浮橋を渡るが如し。喬木帯既につきて灌木帯となる、八方院に近づきてヒメスミレサイシンの稀品を見る。表山の西端最高處を八方院と稱す、海拔七千五百五十三尺、名稱自詮四望開瀾。表山の連峭は、東方遠く、蜿蜒起伏して五地藏の峰に連なり。

其の左方直に天を摩するものは、これ戸隠奥山高妻の高峰、七月猶ほ残雪あり。西方一帶は裾花川の源流深谷を流る、雲霧常に谷底を鎖す。此深谷を隔て、西嶽あり、古來人跡絶えたるところ、險絶無比、丙午の秋前田曙山、北村東紅氏等と爰に登りしとき、豪雨新たに晴れ、西嶽の連峭各所に幾多の飛瀑を生ぜしを見る、西嶽の景の壯麗なりしこと、此時の如きを見ず、遠く西嶽の彼方に日本アルプスの連嶺を望むべし。

四

八方院の附近高山植物多し。之れより表山の連峭凹凸鋸齒の如き頂上を峰傳ひに進むこと約一里余、急坂を下れば、即ち一不動あり、此所に不動澤より來れる裏山路と合す。之れより奥山に向つて各峰所々に十三佛の小祠あり、高妻の頂上までに十祠あり、即ち一不動、二釋迦、三文珠、四普賢、五地藏、六彌勒、七薬師、八觀音、九勢至、十阿彌陀之れなり、今之

れを改めて一抜戸祠、二天照祠、三伊弉諾祠、四青楹祠、五大富祠、六活角祠、七土根祠、八豊雲祠、九常立祠、十高妻祠と爲せども、一般に一不動、二釋迦、五地藏等と稱して新名を呼ぶものなし。

一不動より既に裏山の地域と云ふべし。一不動二釋迦の間は急坂を爲す、二釋迦より三文珠に至る間右方は一大絶壁を爲す、二釋迦の崩れ之れなり、ミヤマクワガタ、イハインチン、ミヤマ、ンネングサ等岩面に開花せるを見る。烈光を受くる乾燥せる岩面にミヤマ、ンネングサの蝸附せるを見るに其の葉深紅色、其の花鮮黄、實に珊瑚の葉黄金の花其の美云はん方なし。

五地藏の峰に達すれば守田資丹翁の作りしと云ふ小屋あり、稍々平坦にして根曲り竹の生ひ茂れるところにあり、間口九尺、奥行二間、頗る破壊したれども雨露を凌ぐに足る、高妻に登るものは皆此地に露宿する

を常とす。

三十八年の夏なりき、此所に來る途中一不動より雷雨に遇ふ、高山の雷雨電光脚下に閃めき、雷鳴身邊に轟き、篠突く豪雨面を向くべからず、全身悉く濡ふ、加之ならず三文珠の附近にて日全く暮れ、闇を辿りて五地藏の小屋に入る、豪雨小やみなければ一步も小屋より出づる能はず、さなきだに夜寒堪え難き五地藏の峰頭、火を焚くの薪なく飯を炊く能はず、飢寒交々至る、一行三名無言暗中にありしこと多時、夜半雨全く收まり、断雲の間に月光を見る、即ち小屋を出て、附近より針葉樹の枝を折り來り、始めて火を焚くを得たり、然れどもツガ、トウヒ等の雨に霑る青葉容易に燃えず、徒らに白煙の濃々たるのみ、衣袂全く乾かざるに天明に達せり、通宵一睡だも爲すこと能はず、煤烟の爲めに汚れて一同の面貌野獸の如く、相顧みて啞然たりしことありき。

これも同じ年の事なりき表山を経て此地に來たる日は既に桑榆に落ちて暮色蒼然物淋しき夕まぐれ予獨り火を焚きて水を得んが爲めに谷に降りし人夫の歸るを待つ時に一兎兒あり傍の叢中より出て余を距る數間小屋の前面に來る次て右より左より二匹三匹遂に五匹となり余を見て恐れず喜戯すること暫時人夫の歸り來れる蹇音に驚きて姿を隠せりあゝ此深山野獸も亦吾人に親むを見る。

五

五地藏より猶ほ進むときは益々幽邃群猿の遊べるを見しこと屢々なり。愈々高妻の峰に登らんとすれば髯剃り胸突の嶮あり喬木殆んど絶えて四邊一面に根曲り竹の密生せるあり之れに縋りて峻坂を登る。夏日の烈光を負ふては流汗淋漓漸く高妻の一角に達し萬古の長風面を拂ふとき汗衣冷かなること氷の如く全身の毛孔悉く粟立つ。

絶頂附近は一木一草皆高山性の者ならざるなく龍鬚虬髯四時其の色を改めざる偃松の一帶紅果壘々綠莖に珊瑚を嵌せるコケモ、の一群岩石磊塊たる間に綠青色なる一面の銅鏡あり傍らの一祠は十阿彌陀の小祠なり。

展望の宏濶雄大なる八方睨五地藏峰等の比にあらず表山の連峭の如きは白雲を隔て遙かに脚下にあり。

五地藏峰高妻山等の山林は之れを構成せる岩石表山の如く集塊岩より成るにあらずして第三紀層の砂岩礫岩の累層を貫きて迸發せる閃英富士岩なるを以て石質堅硬綠色を呈せり高妻の如きは本邦に於ける塊状火山の好例なり。

頂上の北隅に三角點あり傍らに摩利支天の小祠を見る之れより猶ほ山稜を北方に降れば劔の道の嶮岨ある此所を渡り小池附近を経て乙

妻に達することを得べしと雖も高妻より奥に踏み入るもの尠なし。高妻より乙妻に達する間左方は之れ無間谷大地獄の深谷峭壁削成谷底幽かに銀蛇の走れるを見る之れ裾花の源流たり岩壁所々に高山植物の稀品を見る所産の種名の如きは屢々世に發表されしもの今徒らに蛇足を添へず。

早朝五地藏を發し高妻を越え乙妻に到り再び五地藏に歸らば之れ實に一日の行程たり然れども余は常に早旦五地藏を發し高妻を極め大地獄に至りて採集をなし五地藏に歸り中社に降り黄昏長野に歸着するを常とす。

五地藏より舊路を取りて一不動に下り之れより表山道と別れ不動澤を下ること少許にして氷清水と稱するあり俗に一杯清水と呼ぶ。猶ほ下ること六七町不動瀧あり絶壁を横過する細徑あり帯岩の險之れ

なり。又峻坂を下れば路は溪流に合す此附近第三紀層の岩石中屢々化石を産す。右に或は左に溪流を徒渉すること再三再四途にトガクシシヨウマの原産地たる大洞澤に達す路之れより平夷喬木帯中を通過すること二十分始めて戸隠原に出づべし低平なる曠原一條の林道戸隠中社より柏原に通ず道程五里と稱す。五地藏より柏原まで亦五里内外なるべし大洞澤より來れる細徑直に此林道と合す。黒姫嵐に打ち靡く薄の穂波を分け八千草の花に戯むる、蝴蝶を逐ふて進めば百花絢爛黄紅紫白入り亂れて美しさ云はん方なし草根に千虫の唧々を聞く此原より黒姫に登るの路もあれども五地藏峰より下りては又黒姫を上下せんこと覺束なし一旦柏原に達し鋭を養ひ改めて黒姫に登るべし。

黒姫及び妙高

烏嶺

信越線を往復するの旅客、汽車柏原驛にとゞまらば、北より來る者は右窓を南より往く者は左窓を開け、汝の幘廂を壓して三個の巨人の座せるが如き飯綱、黒姫、妙高の三山、南より北に次列を正うして立てるを見ん、これ日本のスリースターマウンテンズとや呼ばまし。

最南の飯綱は既に登攀を了れり。今や黒姫を説き、妙高を語らざるべからず。

柏原驛附近より見たる黒姫山は略圓錐形をなし、山容圓滿然れども山頂には舊噴火口を存し、其の西北に一基の火山丘を有せり、噴火口底よ

り高きこと三百米、突吾人は之れを小黒姫と呼ぶなり、別に御鷹山の稱あり、徳川幕府時代には此所に鷹を放養し、七人扶持鎗一筋の番人を置きしとかや。

黒姫山は戸隠の嶮なく、淺間の怪なしと雖も、不思議や其の標高の高からざる、割合に高山植物に富み、稀品と稱せられたるリンチサウ、オサバグサ等を産し、其の西方大砥澤にはトガクシシヨウマの産ありと聞く、又飯綱にもありて、菌類の一種、天狗のムギメシを産す、火口に溜水ありサンセウツウの一種を産す、しかも新名を附すべき珍種。

早朝柏原を發すれば、午後四時歸ることを得べき此山、一度は登らざるべからず。

余は三度此山に登山を試み、三度雨に遇ひ、遂に十分なる探究を爲す能はざりき、山靈何ぞ夫れ吾が爲めに其の神秘を示すを惜むことの甚だ

しきや。
 柏原の宿所を發し二ノ倉組を過ぎ其の南麓藥研澤に達す。溪流は之れ湯入川の源其の水微温嚴冬に至るも氷結することなしと云ふ山躰の内部未だ火山活動の餘勢を存して高温なるが故なるべし之れより急峻なる山路を登る。
 雨中の登山頭上は之れ漠々たる白雲脚下亦濛々たる濃霧鳥居川の銀蛇望むべからず柏原古間等の碧落も伏瞰するに由なし手に雲漢をひらき天梯を攀づ漸く火口壁に達すれば其の最高點海拔約六千九百尺柏原驛より高さこと約千三百米突と稱す。火口壁の西南に連亘せるところ屏風岳の名あり其の東端の岩石灰白色に燐爛せるを見る之れ他の火山に於けるが如く硫氣の浸蝕によりて生ぜしものなり。今や全く死滅し冷灰となれる此黒姫も曾ては盛んに噴氣洞を存せしなら

ひ山躰を構成せる岩石は主として複輝石富士岩なり。火口壁の内面は傾斜稍々緩にして假松石南花等密生し其の下にリンチサウオサバグサを産す。火口湖は里人が峰の大池と稱するものなり附近又二三の瀦水あり。此山頂の池底黒魚の棲息せるを見る奇と云ふべし。天狗の麥飯の産地は頂上の社より下ること一丁許り西南に面して一木一草もなき磊塊たる岩石と黄褐色なる粘土よりなれる斜面にて地表より一二寸許の所一面に此菌類を産す大野理學士特に此地に來り本種を採集研究せられたれども未だ其の種名を詳らかにせず。下路は頂上より三時間餘にして柏原に歸着することを得べし。驛の北方一里許にして芙蓉湖の稱ある野尻湖あり一日の清遊を試むべし他に殆んど遊ぶべきの地なし。たゞ蕎麥は之れ信州の粹なり此地の産なる俳諧寺入道一茶彼れの爲めに氣を吐きて曰はく、

信濃では月に佛にあらが蕎麥

二

信越線高崎を發して直江津に向ふ途中二個の難所あり。一は碓氷峠

一は關川谷。關川谷は信越の境上にあり。峰高く谷深く柏原を發して北走する瀛

車は其の頽嵐峭綠の間を過ぐ關川の流れ見るからに涼しく車窓に吹

き入るゝ冷風さながら水の如し。

夏こそ越ある關川谷。冬季北海の濛氣雪となりて襲來し瀛車雪中に

埋没すること歳々再三再四。

柏原驛より北行數哩にして田口驛あり。地域既に越後妙高山麓の一

停車場妙高山に登るものは此の地に下車す停車場に大田切工事の碑

あり銘を讀めば信越境上に瀛車を通ぜし事の如何に困難事たりしか

を想像することを得べし。

停車場より數町にして信越街道に出づ瀛車の開通以來行人稀なる國

道の傍らそこ此所に立てる老杉古松古へを語り一種の趣あり松の根

に腰打ち掛けて妙高の英姿を仰ぐ二重式圓錐形の峻嶺馬蹄形をなせ

る外輪山を廻らして中央に突兀たるは之れ妙高の主峰海拔八千九十

尺北越第一の秀峰。主峰前面の一隆起は之れ前山なり外輪山の左端

稍々高き所を赤倉山と稱し赤倉山と前山間の長谷裾野に引けるもの

之れ小田切の火口瀨なり。外輪山の右端の高點は神名山と呼ぶ其の

前面の深溪は大田切の火口瀨なり。妙高の北に聳ゆるものは鬼ヶ城

山の群峰たり。田口驛より約一里にして左方の支路に入る之れ赤倉

温泉道なり。温泉場まで二十余町平坦ならねど急坂もなく爪先上り

のダンダラ坂。

赤倉温泉は田口停車場より一里二十四町文化十二年の創設泉源は妙高山腹北地獄谷より湧くもの平均四十四度の温度を保ち炭酸泉にして清澄なり浴舎は香嶽樓香雲館等十四軒戸數總て三十五六戸海拔約二千五百尺四望開闊眺望に富む中洲三島翁會て赤倉二十景を撰す。

曰く香嶽殘雪曰く米山浮雲曰く神名驟雨曰く黒姫斜暎曰く遊園驚語曰く古池轟聲曰く蓮湖明鏡曰く苗瀧降龍(苗瀧は地震瀧なり)曰く班尾皎月曰く關田晴暎曰く關川水瀉曰く關山涼烟曰く中山霧海曰く板橋稻雲曰く春日古壘曰く烏坂舊城曰く直江漁火曰く高田炊烟曰く佐島青黛曰く越海白帆之れなり。

三

赤倉を發し温泉の埋樋に沿ふて進む傾斜緩慢なる草原なり。行くこと約一時間にして圓山の山側清水場に至る清水混々として湧出す之れより漸々路急にして夏草深く前山の腰を繞つて進む。左は天日

蔽ふ雜木林右は蕪莽茫茫たる深谷路巾僅かに一二尺潤底遙かに白雲の搖曳せるところ燕温泉の浴舎を見る。温泉より約三時間にして大崩に達す前山の頂上なり温泉の元湯此地にあり熱湯盛んに湧出す遊離せる硫黄は滿地に黄色を呈し硫臭紛々鼻を衝く之れより僅かに人跡を認めて登る。三十七年の夏なりき一名の人夫を伴ひ此所に來りしとき朝來天候思はしからざりしが益々險惡となり雲霧氳氳の景は將さに怪風盲雨に變ぜんとす人夫大に恐怖し下山を乞ふて止まず余斷じて許さず茫々たる白霧を分け硫黄採集地附近に登るやがて路は根曲竹の密叢に入る葉末の露繁く全身爲めに濡ふ天狗平に達し細徑の交叉せるを見る右は妙高主峰に登るもの左は天狗の躰と稱する小丘に達するもの正面に降るときは赤倉山の溪に下り赤倉温泉に歸るものなり破壊せる木造の小堂あり此所に休憩す時に沛然として驟雨

至る、神名山の驟雨は之れか、雲霧風雨共に全山に襲來し、冥々濛々山を蔽ひ谷を繞り、凄絶幽絶、人夫は切りに下山を乞ふ、余從はず、疾風猛雨上ること能はざるが如く、下る事をも得ざればなり、只運を天に任せ、風雨の鎮まるを祈るのみ待つこと、暫時驟雨一過、雲飛ぶこと遅々たり、時未だ午前十一時頂上までの行程を人夫に質せば、約一時間半と。

雨天の登山得る所、少なかるべしと雖も、既に此地に來り空しく下山するに忍びず、即ち人夫を督勵して頂上に向ふ。花は盛りに月は隈なきをのみ見るものか。は高山の景晴れては晴天の偉觀あり。雨には雨天の奇觀あり。千山萬岳一眸の下に集まり、雲烟萬里の遠きを極め、胸宇宏潤、吾人をして崇高偉大を觀せしむるもの、之れ晴天の景なり。怪雲悒鬱千態萬狀、變幻出沒、氣象千萬、凄絶怪絶の感あるものは、雨天の景なり。よし展望を縱にすること能はざるも、希くは妙高山上の怪雲に

嘯かん。

天狗平より少しく登りて小池あり、更に登ること六七町、少彦名命を祠れる小祠あり、根曲竹の密叢を分け、富士見石を過ぎ、笈摺貝摺の難所に至る、鐵鎖に縋りて岩面を攀づ、漸にして頂上に至り、阿彌陀堂に達す。

頂上は意外に高山植物の珍種少なく、之れを黒姫等に比すれば遙かに劣れるを見る、戸隠等とは日を同うして語るべからず、難破船の橋頭の如き三角標濃霧の間に出没せる日本石玉の如き水滴の滴下する二ヶ所の靈泉炎暑を犯して登山せしならんには、必ずや甘露の如くならむものを、雨に遇ひ露に濡ふたる吾は、一掬すべき勇氣もなし。頂上を徘徊すること約三十分、直に舊路を取りて下山の路に就く、途中幾度か顛倒、腰下悉く泥土に汚れ、赤倉に歸着せし時、浴舎の人々の呆れ顔なりしもおかしかりき。妙高山の登攀は、赤倉より登り四時間半、降り三時間

半ならば十分なるべし但し休憩時間を省くこと勿論なり。

八ヶ嶽

海拔約二千九百三十二米突九千六百七十余尺

鳥嶺

一、八ヶ嶽の山勢

エドムンド、ナウマン氏の所謂フオツサマガナ、或は原田博士の富士拆帯と稱する一大地溝線本州の中部を横貫し之れに沿ふて焼山、妙高山、戸隠山、黒姫山、飯綱山、冠着山、聖山、立科山、八ヶ嶽、茅ヶ嶽、富士山、愛鷹山、箱根山、天城山等の諸火山及び伊豆七島、八丈嶋等の火山嶋を噴起し所謂富士火山帯を爲せり就中本邦の名山富士と信甲の境上に聳ゆる八ヶ

嶽とは甲府盆地を隔て、一は南方の天に聳立し、一は北方の野に盤廻し遙かに相對峙して天下の英雄唯だ使君と我のみと云はぬばかりの相貌心にくし。

一は行人絡繹織るが如き東海道のほとりに聳峙して其名天下に聞え、一は千山萬岳環峙の間に磐壘して其の名を云ふもの尠なし然れども本邦の一名山語らざるべからず。

諏訪の海衣ヶ崎のほとりより白雪を冠せる八ヶ嶽を仰ぐときは確かに其の崇高を認むることを得べし中央東線富士見日野春韭崎等の各驛を過ぐるとき八ヶ嶽の峰頭を望めば整然たる山脚左右に長く引き、一は鹽川の谷に、一は釜無の谷に而して其の間車窓前面數歩の地より峰頭まで一木の之を遮るなく赤裡々たる有様或は壯嚴を叫ぶ能はざるも亦雄大と呼ぶことを得べし。

手ならば十分なるべし但し休憩時間を省くこと勿論なり。

八ヶ嶽

海拔約二千九百三十二米突九千六百七十余尺

烏嶺

一、八ヶ嶽の山勢

エドムンド、ナウマン氏の所謂フオッサマガナ或は原田博士の富士拆帯と稱する一大地溝線、本州の中部を横貫し之れに沿ふて焼山、妙高山、戸隠山、黒姫山、飯綱山、冠着山、聖山、立科山、八ヶ嶽、茅ヶ嶽、富士山、愛鷹山、箱根山、天城山等の諸火山及び伊豆七島、八丈嶋等の火山嶋を噴起し所謂富士火山帯を爲せり就中本邦の名山富士と信甲の境上に聳ゆる八ヶ

嶽とは甲府盆地を隔てし一は南方の天に聳立し一は北方の野に盤踞し遙かに相對峙して天下の英雄唯だ使君と我のみと云はぬばかりの相貌心にくし。

一は行人絡繹織るが如き東海道のほとりに聳峙して其の名天下に聞え一は千山萬岳環峙の間に盤踞して其の名を云ふもの渺なし然れども本邦の一名山語らざるべからず。

諏訪の海衣ヶ崎のほとりより白雪を冠せる八ヶ嶽を仰ぐときは確かに其の崇高を認むることを得べし中央東線富士見日野春韭崎等の各驛を過ぐるとき八ヶ嶽の峰頭を望めば整然たる山脚左右に長く引き

一は鹽川の谷に一は釜無の谷に而して其の間車窓前面數歩の地より峰頭まで一木の之を遮るなく赤裡々たる有様或は壯嚴を叫ぶ能はざるも亦雄大と呼ぶことを得べし。

余は日本アルプスの峰頭に立ちて南方の天を望むとき雲烟渺茫たる間に先づ八ヶ岳を求むるを常とす之れ圓錐形を爲せる立利山と其の南に横簇せる八ヶ岳の山容とは千山萬岳波瀾の如く起伏せる間にありて最も認め易ければなり一度萬山の間八ヶ岳を見出すときは其の左に荒船淺間四阿山等をもとめ右に甲州駒ヶ岳地藏鳳凰白峰等を見出すことを得べし。

世に入ヶ岳の峰頭は八葉を爲すが故に此名ありと稱するものあれども必ずしも然らざるものゝ如し八はたゞ數の多きを表はせるものと見るこそ穩當ならむ而して一般に入ヶ岳と呼ぶるものは美濃戸山横嶽赤嶽中ノ嶽阿彌陀嶽權現嶽編笠嶽西嶽等の一團なりもと複式火山なれども外輪山の西部は破壊して其の痕跡を止めず今は其の一半半圓形をなして殘存せるに過ぎざるなり。

峰ノ松目横嶽石尊赤嶽龍頭嶽ハゲ石ツル根旭嶽權現嶽擬寶珠嶽編笠嶽西嶽等は馬蹄形をなして西方に開ける外輪山上に環座せる各高點に名付られたるものなり而して獨り阿彌陀嶽は赤嶽の西方に噴起せる火口丘とす。

硫黄嶽は八ヶ岳の北に隣接して噴起せし全く別個の火山なれども其の火口壁八ヶ岳と相連れるを以て八ヶ岳と共に記述せざるべからず。硫黄嶽は八ヶ岳火山に比すれば噴出の時期新らしく今も猶ほ火山活動の餘勢を存して硫黄洞の跡を殘し温泉の湧出を見る本澤温泉之なり其の火口壁は東方全く爆裂破壊して深谷をなし殘存せる火口壁は東向馬蹄形をなし其の絶壁急峻削るが如く本澤温泉の庭上より仰ぎ見るときは成層せる火口壁一面に赭色を呈し一種悽愴の感あり温泉附近は一般に針葉樹多く林間に山草中の稀品オサバグサトカチスグ

リ等を産す。

硫黄嶽の西に接し八ヶ嶽外輪山の北壁をなすものは峰ノ松目及び美濃戸山なり全體複輝石富士岩より成り舊火口壁の内面は其の傾斜急峻なれども自由に跋渉することを得べし余はキバナノアツモリサウの新産地を此地に得たり。山頂は平坦にして高山植物多し。

横嶽は外輪山東壁の一部にして内面は全く登攀すべからざる急峻なる峭壁外面も亦其の傾斜頗る急なり硫黄嶽方面より赤嶽に通ずる細徑は此屏風の如き山稜に通ぜり所謂劔の刃渡りとも稱すべきところより此横嶽の内壁こそ高山植物の寶庫なり。

横嶽の南方に接し巍然九天を摩せるもの之れを赤嶽となす八ヶ嶽群峰中の盟主信州南佐久甲州街道より仰ぐときは其の山勢如何に雄峻なるかを見よ東方の外側を除くの外殆んど赤裸々として複輝石富士

岩の山骨裸出し草木甚だ尠なし絶頂に參謀本部測量部の小舎及び三角點あり赤嶽絶頂の眺望は頗る廣濶特に甲府の盆地は一眸の下に聚まれり人の八ヶ嶽紀行を讀むに此地に來り水の缺乏に困難せるを記さざるなし實に本澤方面より登るときは硫黄嶽の頂きに登る途中に於て湧泉を見るの外全く水なし然るに不思議や此赤嶽の絶頂に於て靈山の精氣凝つて珠玉の如き涓滴となり早天にありても數時間にして約一斛の水を得べき靈泉あり赤嶽に登りて此靈泉を見出す人あらばこれ共に山を語るに足るの士なり。

赤嶽の西に阿彌陀嶽の雄峰あり舊火口内に噴起せる火口丘に外ならず一條の山稜中の嶽を介して赤嶽と連絡す高峻赤嶽と相伯仲す阿彌陀火口丘の火口も頗る廣大なるものなりしも大半破壊して阿彌陀嶽及び中ノ嶽は實に其の北壁の一部に過ぎず八ヶ嶽舊火口は阿彌陀

嶽の噴起によりて南北に切半せらる阿彌陀嶽の絶頂一步北に落ちたる水は流れて柳川の火口瀬となり諏訪湖に入り遂には東海第一の天龍川の波となる而して一步南に落ちたる水は立埴川の源となり釜無川に入り本邦第一の急流富士川の急瀬となる余曾て赤嶽に登るや人夫は此山を指し黒白合多く又途中アカタケチヨウシンの美花ありと云ふ黒百合は既に横嶽に之れを得たり唯アカタケチヨウシンに至りては始めて聞ける珍名且其の花美を極むと聞きては探らざるべからず中嶽を越えて阿彌陀嶽に赤嶽チヨウシンなる者を求むれば擬ふ方なきタカネバラのみ斯くて意外に時を費し歸途硫黄嶽の頂にて日全く暮れ暗を辿りて本澤に歸りし困苦は未だに忘れず赤嶽より中ノ嶽を經阿彌陀嶽を越えて諏訪郡に下ることを得べし。

弱なる集塊岩より成れるを以て風雨の侵蝕特に甚だしく危岩突兀怪異を極む曾て赤嶽の絶頂より龍頭嶽を望みしとき途中金光の燦爛たるあり夕陽の岩頭に映ずるにやと思ひしもさにあらず其の色あまりに鮮黄怪愕に堪えず山稜を傳ひて近づき見ればこれなん金露梅の小灌木が一面に満開せるなり金露梅の野生は八甲田山にもありと聞けり。

外輪山は権現嶽より西南に彎曲し擬寶珠編笠を起し遂に西に轉じて西嶽となる編笠及び西嶽は頂上まで喬木帯を以て蔽はるを見れば高山植物に乏しきは勿論なりとす。

二、八ヶ嶽の登路

八ヶ嶽は信州南佐久諏訪及び甲州方面の諸方より登ることを得べし。一、信州南佐久郡方面の登路。

東京を出發し此登路によりて八ヶ嶽に登るとせば第一日早朝上野停車場を發し正午御代田驛に達し之れより岩村田野澤白田等を経て馬流に到るべし此間七里と稱す甲州街道にして馬車の便あり第二日早朝馬流を發し松原稻子等を経て本澤温泉に達すべし此間約四里半馬を通ずることを得る路なるを以て登攀容易なり健脚家にあらざるも午前中に達することを得べきが故に此日猶ほ温泉附近或は硫黄嶽を探ることを得べし本澤温泉は硫黄嶽の中腹にありて海拔約七千尺本邦に於ける最高所の温泉なりと稱せらる設備素より十分なりと稱すべからざるも登山家には左程の不便をも感ぜざるべし此本澤温泉を根據地として八ヶ嶽を探究するは最も策の得たるものと云ふべし

二、信州諏訪郡方面の登路。

第一日飯田町停車場を發し中央東線によりて茅野驛に達し此所にて

下車し登山の準備をなすべし茅野本澤間は約七里と稱せらるゝ近路なれば第一日に茅野を越えて諏訪に達し四近の勝を探り第二日茅野まで逆行して登山するも可なり諏訪方面よりは三方に登ることを得べし一は阿彌陀嶽を越えて赤嶽に達するもの一は柳川の谷を登りて赤嶽横嶽間の四所に登るもの共に露宿の用意を爲さる可からず他の一は槻ノ木を經夏澤峠を越えて本澤温泉に達するもの路は駄馬を通ずることを得べし登攀容易諏訪方面より登るものは此路を取るべし

三、甲州方面の登路。

甲州方面より登るに又數道あり板橋方面より登るもの日野春より大泉村を經て登るもの或は小淵澤より小荒間を經て登るもの皆人の知れるところなり就中小荒間を經ての登路距離最も短かしと云ふ即ち中央東線小淵澤驛に下車し小泉村小荒間(僻阪)の地相當の旅舎なしと

云ふに達し之より裾野を登ること約一時間半、フルソマ川の谷に沿ふて登り屏風岩の附近を過ぎて傾斜急峻なる左方の斜面を登り、中ノ三ツ頭附近に出て権現嶽を越えて赤嶽に達すべし、小荒間より権現嶽まで約五時間、権現嶽より赤嶽まで約二時間を要すと云ふ、去れば此登路によりて八ヶ嶽を探らんには又露宿の用意を爲さざるべからず。要するに八ヶ嶽に登るものは一旦本澤温泉に達し、此所を根據地として探究するを至便とす。

三、甲州街道

既に八ヶ嶽の山勢を説き登路を述べ、爰に登山記中の二三節を記述せんとす、早朝上野を發し正午御代田に下車し岩村田行の馬車に乗る、馬車は例のガタ馬車、々々、古く屋蓋低く巾狭し一頭立六人乗、然るに乗客は海ノ口に赴くてふ上州の伯樂四名、野澤行の三名、但し一名は十歳ばかりの少女なり、之れに余を加ふれば七名半、さなきだに堪え難き陋隘なる車内、特に四名の伯樂は頗る泥酔酒氣紛々不快極まりなし、ことを知らず顔なる栗毛の駿足紅塵を飛ばし熱沙を蹴立て、走る御代田岩村田間は約二里と稱す、路の半ばも來たらんと思ふ頃、車輪はげしく何物にか衝突し車躰激動するや、車に異様の響きあり、御者直に飛び下り車の輪鐵の脱出せしを見出し、乗客の力を借りて復舊策を講じたれども恢復すること能はず、一同止むを得ず徒歩岩村田に向ふ、馬車は路傍の民家に寄りて漸く假修繕をなし、再び余等に乗せて徐行岩村田に達す。岩村田にて車を換ふ、此度は亦一層下等なる馬車、々々、躰の古きは申すに及ばず、馬は瘦せて骨立し、御者は頑固なる半白の老翁、酒氣を帯びたり、此御者必ず馬糧を飲むの翁ならむ、馬の歩み誠に遅々たり、さなきだに堪え難き炎熱一さは苦悶を覺ゆ、終始如斯歩調ならんには、此日馬流に

かりの少女なり、之れに余を加ふれば七名半、さなきだに堪え難き陋隘なる車内、特に四名の伯樂は頗る泥酔酒氣紛々不快極まりなし、ことを知らず顔なる栗毛の駿足紅塵を飛ばし熱沙を蹴立て、走る御代田岩村田間は約二里と稱す、路の半ばも來たらんと思ふ頃、車輪はげしく何物にか衝突し車躰激動するや、車に異様の響きあり、御者直に飛び下り車の輪鐵の脱出せしを見出し、乗客の力を借りて復舊策を講じたれども恢復すること能はず、一同止むを得ず徒歩岩村田に向ふ、馬車は路傍の民家に寄りて漸く假修繕をなし、再び余等に乗せて徐行岩村田に達す。岩村田にて車を換ふ、此度は亦一層下等なる馬車、々々、躰の古きは申すに及ばず、馬は瘦せて骨立し、御者は頑固なる半白の老翁、酒氣を帯びたり、此御者必ず馬糧を飲むの翁ならむ、馬の歩み誠に遅々たり、さなきだに堪え難き炎熱一さは苦悶を覺ゆ、終始如斯歩調ならんには、此日馬流に

達せんこと覺束なしと心窃に之を憂ふ野澤に達するや白田に赴く乗客數名ありて新一臺の馬車を仕立てたれば余は直に之れに乗り移れり白田に達するや又車を換ふ此度は二頭立十人乗客に一人の查公あり本澤温泉附近の地理を説きて詳細を極む大に得しところありき馬流に達せしは實に午後七時七里の街道七時間を費す手荷物なくば寧ろ徒歩するの快なるに如かず御代田より馬流に至るの間岩村田野澤白田の三個所にて馬車を次ぎ換ふるが爲め無用の時間を費す加之ならず途中乗客を減ずるときは發車せず一車を買ふにあらざれば目的地に達すること能はざることあり其の不便言語に絶す近來起業熱の盛なる此街道に電氣鐵道を敷設する爲め幾百萬圓かの資本にて電氣鐵道の企劃を見る彼等は電氣鐵道にて何物を運搬せんとするにや。

四、八ヶ嶽の裾野

馬流は甲州街道の一短亭旅舎僅かに二戸あるに過ぎず人夫を雇はん
とせしも適當なる者なし會て客に従つて硫黄嶽に登りし事ありと云
ふ人夫を得て本澤温泉に向ふこととなせり宿所の主人は馬流本澤間
の行程約七里と稱し人夫は無法の賃錢を食らんとせり翌日午前七時
馬流を出發し甲州街道を行くこと約一里人夫が福山と稱せしところ
より右方の支路に入る此人夫は會て都人士某氏等に從ひて登山せし
に山に馴れざる人々にて路容易に拂らず頗る困難を極めし由且前日
余が上野より出發せし由を告げれば亦某氏等の亞流と見て取り切
りに行を速かにせんことを訴え且自己の非常なる健脚家なるを誇る。
諸方の高山を跋渉せしも余に從ひて泣かさりし人夫なし窃かに彼の
愚を笑ふ人夫は八九貫目の荷を擔へり彼れ如何に健脚なりと雖も全
速力にて進まば彼れは決して從ふこと能はざるべし乃ち人夫に告げ

て曰く諸健脚無雙の汝は余が爲めに行を緩ふせよと、稻子に達するや路急阪となる余即ち一躍數町の急阪を走せ登る之れより茫々たる八ヶ嶽の裾野路稍々平坦なるが故に疾風の如く進めり原の中央まで又人夫の姿を見ず路傍の木蔭に待つこと多時人夫漸く到る余直に出發疾驅前の如し彼れを待つこと再三斯くて人夫は前の廣言に似もやらず遂に兜を脱ぎて未だ健脚客の如きを見ず重荷を擔へる身の到底行を共にすべきにあらず希くは少しく行を緩ふせよと余笑て之れを諸す。

今廣漠たる此八ヶ嶽の裾野に立てば一陣の長風颯として赤嶽の峰頭より來り數莖の女郎花香なくしてゆらぎ一脈清涼の氣天地に充つはてもなき裾野の末は千曲の谷となり黒き森蔭より白烟の搖曳たるを見る朝霞既に消えて原頭の大氣清澄萬象すべて鮮明なれども豊里稻

子海尻等の離落は羅にて蔽はれたるが如く淡きこと夢にも似たり遙に望む淺間の峰頭今朝も白烟東に靡けり東に聳ゆる荒船火山帆檣悉く碎けて甲板上に何物をも留めず萬山の波濤を破つて舷頭北天に向ふ。火山の噴出物堆積して生じたる此高原元來水を含むこと少なく一大乾盤をなせば草細く且短かし然れども火山灰必ずしも瘠土にあらず處々に亭々たる針葉樹シラカンバハンノキ等の喬木ありて一種特異の景觀あり之れ獨り此裾野のみならず富士の裾野戸隠飯綱原妙高山淺間山の裾野日光赤沼原立山阿彌陀原等皆然らざるなし。余は此寥廓たる裾野に立ちて言ふべからざる一種の感慨の胸裏を往來せるを覺ゆ若し一度秋風蕭殺萬木其の葉をふるひ千草の花悉く凋萎せば此荒原の風物果して如何見よ原頭の賽の河原を此荒涼無邊の

風景に接して、行客が世になき弟としのび我が子を思ふて此所に此石を積めるにあらずや。

草原盡きて路漸く急を加へ、陰鬱なる喬木林中を通過し、やがて左に溪聲を聞き、右に破れたる硫黄精製所を見る。既にして林間を漏るゝ人語を聞くもの之れ本澤温泉なり。

馬流より本澤まで七里とは全くの詐り路は四里半にして近し温泉に達せしは午前十時なりき、四里半の山路殆んど三時間にて達するを得たり、人夫の従ふ能はざりしは無理ならず温泉に案内者ありとの事故馬流よりの人夫を歸へし余は獨り此日硫黄嶽を探る。

五、本澤温泉

本澤温泉は硫黄嶽の半腹海拔約七千尺もありなん南佐久郡南牧村字本澤にあり、八ヶ嶽登山者唯一の根據地として重要なる温泉なり、明治

二十一年の開湯温度低く浴槽狭しと雖も、清潔なる新築客室あるを以て登山家の爲めには比較的不便少なき方ならん、近時本澤温泉に關し新紙の傳ふところ左の如し、怪と云ふべし。

本澤温泉の不思議 同所は名に負ふ八ヶ嶽の半腹にありて南佐久郡海ノ口よりは四里、諏訪郡の人家所在地泉野村までは二里あり、道路として此二ヶ所へ通ずる山道あるのみ、冬時は積雪甚だしく營業を爲す能はざるより毎年五月下旬より十一月下旬までを開湯期とし、休業中は湯守を置きて監守することになしきたりしが、此迄數人の死病者を出だしたるより地方人は天狗の仕業なりとて恐れ居るより、今回海ノ口署にて取調べたるに三十七年四月諏訪郡豊田村林某が留守居中、縊死し翌三十八年二月同郡飯島某が妻と共に籠居中水腫病に侵され治療の爲め歸村の途中にて死亡し三十九年三月九日南佐久郡北牧村

菊地某居所より一町許り離れたる鑛泉小屋へ鑛泉を汲みに行き入口二尺四方許なるが殊更氷結して狭くなれる所へ頭を差入るゝや忽ち異臭の刺撃にて卒倒死亡し又同年十二月には同村畠山某單獨籠居中腦溢血を起し爐邊に倒れて焼死を遂げ其の他二名不詳の病死者ありしとの事なり該所は氷結の爲め飲用水は悉く氷雪を融解して使用する事非常に寒冷なる事積雪の爲め運動し能はざる事無人の境寥間に堪えず精神に異状を來たす事等の原因によりて此事ありと。

高地越冬者の變死高山登山家の大に研究すべき價値あるを信ず。

六、硫黄嶽

本澤温泉より硫黄嶽の頂上に達するには一たび夏澤峠に至り之れより山稜を左方に登るを順路とす約一里強地理を案ずるに此路は三角形の二邊を迂廻するもの距離に於て時間に於て頗る損あり余は温泉

附近より直に喬木林中を上り、驀然火口壁の北端最も低きところを登らば最も利ありと想像し峠道を行くこと二三町にして直に左方の林中に入る、不知案内なる此山案内者なしに。

白檜、梅、一位、唐松、樅等の喬木、天日を遮りて薄暗く、冷涼多濕なる空氣肌に觸れ、千古拂はれざるの枯葉半は朽ちて土と化す、此陰鬱なる喬木帯に入る毎に吾人は常に一種不快の念あり、憂鬱、厭世、恐怖等の感情相次て起る、純潔雪にも勝ると形容すべき小白花を開くオサバグサは、此森林中に産す、天の配劑又妙ならずや。

オサバグサは駒ヶ岳、立科山、黒姫山、經ヶ岳、日光等の諸山にも産するものなり、其の葉概形羊齒の如く、山地にありては七月下旬開花す、此地の産を培養せしに頗る強健、二年目には二株となり、三年目には五株に分蘖し、年々四月美事に開花し、其の元氣山地の者に比して遜色なし。

火口壁の北端を登るを得べしとの想像は全く架空なりき峨々たる懸崖
 崖翹なくんば攀べからず止むを得ず右方に大迂回をなし夏澤峠より
 の登路に出でざるべからずあはれや急がば廻はれの俚諺今日も亦眞
 なりき然れども全く徒勞にはあらざりし。途中の岩面皆虫捕堇の實
 景に接しトカチスグリの新産地を得たりトカチスグりは曾て北海道
 十勝に於て發見せしもの内地にありては立科山にて之れを得たる者
 あるのみ今又此硫黄岳に第二の産地を得たり高さ尺に充たざる小灌
 木多毛なる紅果を着く。
 山上に達して上方より火口壁の絶壁を俯瞰せしとき其の恐ろしさに
 戰慄せり絶頂に至り少しく西方に進み咲き亂れたる高山植物を擷と
 し、西北方を展望せし光景の美忘るゝ能はず日本アルプスを背景とし
 て脚下に展開せられたる諏訪一帯の盆地灼爍たる諏訪湖銀線の如き

四近の細流野は緑に村は黒し、ムシトリスミレの紫に心を奪はれ、リン
 チサウの淡紅花純白なるツメクサの各種黄花ノアツモリサウの新産
 地を美濃戸山に得たり鹿逐ふ獵師は山を見ず遂に横岳に近く進み時
 の移るも知らざりき時辰を見て五時を過ぎたるに驚き呆れ往路を降
 らんか日中に夏澤峠まで達する能はず今や尋常の手段を取ること能
 はざれば直に硫黄嶽の南面偃松中を横断し火口壁の南端に出で絶壁
 に降路を求め直下温泉に至るの途のみ日暮れて路遠ければ倒行逆施
 するの外なしかばかりの偃松渡るに何の仔細やあらんと火口壁の南
 端に立てる三角標を目標として進めりねよげに見ゆる夏草の中にも
 枝に棘ある茨の雜れり遠く望めば緑氈の如き偃松始めの程は枝低く
 して何の困難も見えざりしが漸く進むに従ひて地上を距る四五尺の
 ところにて枝極縦横に錯綜し匍匐して其の下を潜るは容易の業にあ

らず弾力ある枝上を踏めば弾ね飛ばさるゝこと屢々なり足も勞れ手も弱り前進容易ならず後退亦無用の時を費さざるべからず實にや高山にて入るべからざるは此偃松渡るべからざるは此緑色の鐵條網日は既に桑楡に落ちて暮色蒼然東より來り四邊の山嶺は鼠色に麓の籬落は全く暗し漸くにして三角標の附近に出て恐ろしさも忘れて火口壁を下れば喜ぶべし硫黄採りの往復する細徑に出づ日全く没して谷底遙かに茂林を隔て、本澤温泉の燈火明又滅。

七、横嶽の植物

夜は未だ全く明けず足元未だ小暗きに之字に登る峠道温泉より十五町にして夏澤峠の高點に達す之より左方に山稜を傳ひて行く登ると數町にして喬木帯を脱すると同時に夜はほのくくと明け離れぬ日中だにも冷涼なる高山の頂き折りから吹き下ろす天風寒骨に沁し人々

々の吐く息白し一行は赤嶽行の測量手三名余と人夫と五名なりき。硫黄嶽の頂きまで數町のところに湧泉あり此附近にて日出を見る下界は今朝も一面の雲の海。

絶頂より淺間を見るに噴烟特に盛なるが故に撮影す測量手の一行は直に赤嶽に向ひ余と人夫とは悠々採集及び撮影をなす。

硫黄嶽より横嶽に至るの間タカチヌミレ多し余は本種を鉢ヶ岳立山鉢ヶ岳白馬針木峠佐良越燕岳屏風嶽大天井横尾通り槍ヶ岳等にて採集し本邦高山に普通なる種類なるを知れり鉢ヶ岳以下の産地は恐らく余の新発見に屬する産地ならんかオヤマノエンドウチャウノスケサウウルツブサウ、ハクサンイチゲツクモグサ等多しオヤマノエンドウは播種すれば殆んど發芽せざるなし横嶽の山稜を渡るところ路最も峻なり高山植物の稀品多しウラジロキンバイムカゴユキノシタ、ク

ロユリ、シコタンサウ、チシマアマナ等殆んど應接に違あらず、しかも其の分布の状態を見るときは驚くべきものあり、屏風の如き横嶽の頂上を通ぜる細徑の左は、東南に面せる乾燥なる斜面一帯に偃松ありて植物の種類甚だ少なし之れに反して其の左方舊火口壁の内壁は西北に面し傾斜一層急峻濕潤なり、高山植物の種類に富む、日本アルプスの各峯を踏破し、親しく高山植物の分布を見るに、西方に面せる斜面に如斯高山植物多きは稍々異例となすべし。

横嶽の内外両面を比較するに、一は陽向乾燥せる斜面、一は日光を受くること尠なき濕潤なる斜面前者は高山植物少く、後者は之れに反す、地勢及び水濕が高山植物の分布に影響すること斯の如く夫れ大なり、高山植物の培養に志あるの士思はざるべからず。

左に八ヶ岳に於ける高山植物の主要なるもの八十餘種を擧げたり他

日此地に採集を試み、此等の種類を悉く得る者あらば、八ヶ岳採集は成効せしものと云ふべし。

松杉科

はひまつ

百合科

ちしませきせう

ちしまあまな

ころゆり

くるまゆり

蘭科

きそちどり

こいちえうらん

ありどうしらん

こほのとんぼさう

かめめらん

ふたほらん

いちえうらん

こふたほらん

やまさきさう

はくさんちどり

きんぎょのめいもつちどり

楊柳科

さしほやなぎ

蓼科

うらじろたて

むかことらのき

じんそうすいほ

石竹科

いはつめくさ

みやまつめくさ

たかねつめくさ

こほのつめくさ

みやまみくさ

毛茛科

はくさいいちげ

つくもぐさ

みやままんぼうげ

しなのきんはい

ひめからまつ

罂粟科

こまぐさ

おさけぐさ

十字科

みやまたねつけはな

くもまなづな

虎耳草科

しこたんさう

むかごゆきのした

とかちすぐり

薔薇科

こがねいちご

たかねほら

ごそういちご

みやまたいこんさう

うらじろきんはい

きんろはい

萱科

おやまのえんどう

いはかうぎ

牻牛兒科

はくさいふらう

岩薔薇科

かんかぢらん

薑菜科

きほなのこまのつめ たかねすみれ

繖形科

いぶまほらみ

あまらみ

石南科

いはひげ

つがきくら

あきのつがきくら

こめぼつがきくら

こけも

みねずわら

くろまめのき

あかもの

しらたまのき

うらしまつじ

しろほなしやくなげ

岩梅科

いはうめ

いはかみ

こいはかみ

龍膽科

とうやくりんだら

しまいけあけほのたけ

玄参科

うるつふさう

よつほしほがま

みやましほがま

狸藻科

むしとりすみれ

列當科

おにく

忍冬科

りんねさう

桔梗科

ちしほぎんやう

えぞむかしよもぎ

たかねよもぎ

うすゆきさう

きんぐるま

みやまかうぞりな

八、赤嶽の絶頂

余等が横嶽の最高點に至りしとき測量手の一行は既に赤嶽の頂上に達せしを見る横嶽より赤嶽に移らんとするには横嶽二十三夜と稱する附近を降りて少しく平坦なる所に出て之れより絶頂目懸けて急峻を極めたる斜面を登らざるべからず余等が平坦なるところに休憩せるとき測量手が露宿に要する食糧及び飲料水等を運搬する四人の人は柳川の谷より登り來たれり彼等は谷底無人の小屋に一泊し今爰に來りしなり何れも荷の重さが爲めに疲勞困憊を極め其の一人の如きは未だ會て斯の如き困苦に遭遇せし事なしと叫べり此登路の頗る

困難なるを推すべし。

赤嶽の絶頂はさすがに入ヶ嶽群峰の最高點山勢の雄峻と展望の開濶とは他に比なし北は横嶽硫黄嶽を脚下に伏瞰し山勢遠く根石嶽茶臼山摺鉢嶽に及び立科山に至つて極まり其の右方に淺間の噴烟を望む眼を東に移せば上信境上の連峰何れを夫れと見別け難きも荒船火山は千山萬嶽の波濤を衝きて北進する巨艦にも似たり秩父山塊金峰山御嶽茅ヶ嶽の如きは皆脚下の地上に拜跪す而して富嶽は白雲を破つて峰頭彌々鮮麗なり。

鹽川及び釜無川の二流V字形に流れ駒ヶ嶽地藏嶽鳳凰山赤石白峰の各峰皆指點すべし西北方日本アルプス北部の連峰を一々擧ぐるは煩に過ぎたり余は岩頭に立ちて富嶽を撮影せんとし切に器械を据ゆる足場を作り其の間人夫は無聊の餘り取枠を出して之れを開き乾板

を窺ふ之れを見て大聲叱咤せしに彼れは落付き拂つて唯一見せしのみ何等の害をも加へずと其の愚や及ぶ可からず一秒の千分の一の露出にだに感光すべき此乾板しかも烈光の下に之れを開く盞んぞ害なきを得んや千日に荏たる蓋は焼れ九仞の功も一篋に缺けたり。

赤嶽の峰頭まで人夫を伴ひしは何の爲めぞ數日間苦心して此重き器械を運搬し來りしは何の爲めぞ此峰頭雲烟渺茫の間に立ちて天界の雄姿を此カメラに收めんが爲めにあらずや朝來撮影せし淺間の噴烟諏訪湖の灼鑠横嶽の峻絶赤嶽の英姿阿彌陀の雄渾愚夫の惡戯に遂に書を爲さず之れ余に於て千秋の恨事僅に残れる一枚の乾板にて遙かに富嶽を撮影す頗る逸品今も壁間にありて當時の紀念たり。

一方の岩下に降りて水を求め中ノ岳を越えて阿彌陀の中腹に達し歸來南方に降りてキンロバイを採集し再び赤嶽に歸りしは實に午後四

時なりき時既に遅きを以て測量手の一行は切に其の小舎に宿すべきを勸む然れども狹隘なる小舎中に余等の入るべき餘地なし止むなく人夫を勵まして下山に決す。

横嶽に走るや終日乾燥せる峰頭圭角稜々たる岩角を歩みしこと故二足目の草鞋全く破る止なく布片を裂きて足尖を緋帶し僅かに皮膚の傷つくを防ぐ然れども又忽ちにして摩蔽し其の困苦名狀すべからず高山の頂にて草鞋の缺乏斯の如き困苦は他に求むべからず曲亭馬琴の紀行に。

天城山を越ゆ六里の山中人烟を見ず右手は茂林深く左手は谷なり足を運ぶの地僅かに二三尺に過ぎず砂石碌々として水滴の行く迹滑かなり登ること二里許にして嚮導者見返りつゝ湯ヶ島までは人家なし草鞋を齎らし給へりやと問ふに其の準備せざりしに心苦し

きこと限なし導者云ふ様此山にて草鞋を踏み切らし給へば跣足にて登るの外すべなし近頃此所にて樵夫が草鞋を二百銭に換へたる旅客ありき樵夫も草鞋を賣りては其の日の業を止めて徒らに歸るなれば二百銭を得たるも食るにあらす心して草鞋を踏み切らし給ふなと云ふにいとしく足の運びも抄らず。

とあり屢々登山書に記載せられし一節なれども實に登山家の座右の銘となすべし斯くて余は歩行意の如くならねば意外の時間を費し硫黄岳を北方に降り湧泉ある附近にて日は全く暮れぬ用意の燭火にて道を求め無事温泉に歸りしは午後八時半なりき。

富士山

曙山

太古遼冥の時雲霧萬象を封じ乾坤未だ劃たず冷風吹いて宇宙を撼盪する事幾萬載灑影始めて現はれ寒暄茲に生じ濛氣新に散じて玲瓏として天地全く明かなる時巍巍として一大靈峯を東瀛神州の碧落に仰ぐ者はこれ富嶽の千秋に益ゆるものに非ずや。富士は實に我絶東帝國の正氣を鍾めたるものにして峻秀千古に冠たり千山之に朝し萬水之に稽す遙かに瞻れば洋々たる大瀛の水に泛びて白扇の倒懸せるが如く八采の蓮峯紫微に入りて白雲常に徂徠する者は山神の浩渺として旁午するに非ずや天籟颯々の裡時に仙樂の風飄を聞く者は天部の來つて樂を奏するに非ざるなきと保せんや。

往古地表の未だ牢ならざるや萬波相搏ち千波相凌ぎ茲に溪壑を坎じ、
 茲に巖嶒を生じ起伏綿亘して天と連なるもの、モンブランの如き、ミス
 チーの如き然り其表高或いは富嶽を凌ぐありとするも、凡て是連鬱重
 疊の一角にして未だ富士の如く萃然として背漢に卓超し孤峯にして
 秀靈の氣を標榜する者は非ざるなり。其淨き事珠の如く其崇き事神
 の如く之に對しては容を改ため之を仰いては襟を正さしむる事富嶽
 の如きは宇内全く比倫を見ず古來充つるに不二を以てする蓋し千古
 不渝の文字といふべし。
 富士は我東海の天に朝して駿甲相の三國に跨り海抜一萬二千四百九
 十尺北緯三十五度二十二分東徑百三十八度四十四分に位し地質學者
 の所謂熄火山の一にして純圓錐形をなし全山礫礫磊礫たる熔岩より
 成り山麓喬木帶以上は僅かに點々として密箐の亂點を見るのみ又翠

碧掩冉の風丰に接する能はず仰いて之に攀躋すれば何等崇靈の氣を
 感じ度々の念を生ずるなけれども遙かに之を瞻望すれば壯美の感を
 生じ宇宙の森羅萬象をして其膝下に雌伏せしむるの威あり山の靈に
 非ずして何ぞや。
 富士に登るに五道あり曰く大宮口曰く中畑口曰く須走口曰く須山口
 曰く吉田口。而して大宮口は則ち富士淺間社の有る處にして古來表
 口と稱す。就中山路の最も容易なるは中畑口にして所謂東表なるも
 の御殿場より徑ちに登るべし。須走口は御殿場本宿を縦貫して一路
 長き事二里八丁馬車の鐵軌を借りて富士の裾野の一部落なる須走村
 に達すべし。須山口は佐野の驛を出て西北する事三里にして抵る。
 而して吉田口は則ち峽中の岨峒を縫ひ大月より谷村を経て登る者古
 來先達行者と稱する輩素衣にして金鈴を振り六根清淨の聲朗らかに

陸續として此道を探びたるもの蓋し山路の險なるを以て揮つて身を
 苦しめ以て曩祖の難行に擬せんとするなり。
 予は今や始めて紫微の巔に登り敢て手を伸べて日月を捕捉せんとし
 突如として京を發するに臨み特に吉田口を選びたるものは強て至難
 を冒すの推強者流に非ず偶ま此北口なる者の他に比すれば景致の頗
 る佳なるを聞きたればなり。
 八月一日午后三時電音を同儕に牒じて飯田町停車場に抵る會する者
 手を合せて凡て三人爛々として燧くが如き落暉に向つて進む。
 會て無頼の俠漢が長刀を横へて猛虎の群羊を驅るが如くに敵中に馳
 突し或ひは狗鼠綠林の徒輩が出沒して幾多の行人を脅かしたりと稱
 する小佛の峠は隧道新に成り巨口を開いて長蛇の如き列車を吞吐し
 悠々として餘烟を煙らす所金鳥旋轉して漸く連轡時列の間に落ちん

とし奔水銀屑を撥亂するが如き桂川の清瀬を見。車行漸く緩にして
 徐ろに水村山廓を描き來る。漁夫の長竿を擔げて晚歸する者牧童の
 牛を曳いて太平の頰を謠ふ者旁午として皆一幅倪黃の景致ならざる
 はなし。
 予等は此畫中を剪いて走る事數里漸く山間の峽路に入り猿橋の急湍
 を越えて綿々たる暮靄の間に水勢激越して綿の如くに白き者を望み
 始めて大月の驛に下りぬ。
 驛前の茶亭は皆牌を掲げて富士登拜の客の爲に便せんとし樓丁の提
 灯を振り照して下車の客を迎へんとする者互ひに自家の稱號を呼び
 て喧囂甚だし。
 予等は樓丁の横陣を突破して再び娘子軍の重圍に陥り辛うじて一角
 を排して邁往すれば旅舎海老屋有り鐵馬の起點を前に扣ゆるを以て

相願りみて店頭に投ず。

店は今や下車の客を以て充され、店頭相填咽し、或ひは水を呼び、或ひは

茶を乞ひ、雜拉名狀すべからず。予等は静かに其一隅に據りて、車中に在りて、跼蹐したる四肢を伸べ、衆

客の漸く散ずるを待ち、最終の馬車に搭せんとせり。偶々樓下進み出

て言ふ。「這般大雨に會ひて、鐵軌殆んど濡れ、馬車を拒む事一週日、明日

或ひは修理を企するあらんも、今宵は則ち能はず、如かず夢を大月に

結び、明日を待つて發せんにはと、衆客も皆是に和す。予等之を聞いて沈吟するもの數時、同儕曰く、大月より吉田に至る七里

にして、涼風腋下に生ずるの時、月明に乗じて徒歩するも、又可ならずやと、

時業に九時に及んとし、夜行の凶多きを説いて止むる者あれども、予等

之を肯ぜず、則ち結束して出づ。夜氣深く罩めて、月色濛たり、白氣の凝りて雲となるもの、參差として、但

徠する所、微風徐ろに來りて、道芝の露の團々として、落つる者、碎けて玉

屑となりて、蟋蟀の聲を驚かし、婆娑たる樹梢に、鷓鴣の鳴くものは、冥鬼

の人を招ぐに似たり、漸くにして、道全たく山間に入り、左に奔流の礫礫

を聞き、右に峻崖の峭拔を仰ぎて、透選たる鐵軌の上を行く、四條の細線

は、縷の如く綿々として、盡す間々、石塊の颯起したるものに、足を奪はれ

つゝ、爪先上りの道を上るに、夜とは雖も、土用最中の夏なれば、流汗漸く

額に溢れて、朝裡の冷かなるを覺え、渾身熱して燃ゆるが如く、屢々路傍

の清流に嗽ぎて、爽涼の氣を呼び、青樟の下を尋ねて、細流の瀑布をなす

にして、谷村に入る、谷村は一小都會と雖も、峽中にありては、甲府に次ぐ

者を獲衣を脱して、淋漓の汗を洗ひつゝ、只管に鐵軌に沿ふて進み、三里

の人口を有し、市街櫛比し、商業頗る繁盛と稱す、然れ共時已に三更ならずとして、戸々皆閉塞し、僅かに藝吹の夜を警むるあるのみ。

谷村を過ぎて再び綿渺たる富士の裾野の一部なる都留の高原に入り、偶々流星の下りて樹梢に懸れるが如きに驚く者は、則ち甲州螢の柳葉に縫るなり、漸く行けば、漸く多く、森の蔭水の澗到る所として、青光の閃々たらざるはなく、燦として列宿の地に墜ちたるが如し、惜い哉、今夜偶々月明らかなるを以て、夜光の燦爛を擅まならしむる能はざるを、空しく十氏の壁をして地に委せしむるの憾あり。

小沼は吉田谷村間の小部落にして、般販の地を以て、目す可らざれども、旗を標して酒を賣る家あり、茶菓を鬻ぐ者あり、其凍氷を賣る者は、店頭に兒を駢列して、客の占踞する者七八人なるを見る、嚮に谷村の町に入りて、戸々全く睡魔の襲ふ所となりたるに、今や午前零時三十分にして、

小沼の獨般販なるは、頗ぶる奇なる現象と言ふべし。

予等は先づ旗亭に入りて、食を求むるに、鱈の乾露煮と、焼豆腐の煮占とを獲たり、粗糙口に入る可らざれども、餓る身には、太牢の美味にも優り、頻りに四五碗を夷し、始めて茶を命ぜんとする時、四五の少女、盃手を携へて、來り店頭に立ちて、氷を呼び、頻りに爽涼を掬する者の如し。元より村嬢の紅粉を粧ふ者、敢て美を以て稱す可らざれども、皆妙齡十七八、又紅女の亞流に非ざるに、深更を選んで、嚙々として來り、壯丁の間に介入して、戯むる者、其間多少折花攀柳の情緒を纏綿せしめずんば、非ざるなり。

旗亭の主人、予等の爲に、説いて曰く、此地の風習、頗ぶる他と異り、夏時は午睡を食ぼるに専らにして、夜間多く業を執る、其全く寢に就くは、午前二三時に在り、今や客の戸々に、麤集する者は、一日の業を了りて、始めて

勞を慰めんとして旁午するなりと、同人相見て言なし、然も亭主予等を
欺むかず、小沼を去りて吉田に近づくに従ひ、塙圃を隔て、遙かに散在
する茅屋に、一種の燈光破障子を畫き出して、織を促す音の唧々として
響くを聴く。

午前二時、予等一行は始めて吉田の町に入んとして、一小橋梁の上に行
ずめり、玉兔は今や予等を此處に送り來りて、其職責を果したるが如く
に、遠く鬱穠たる樹蔭に辭し去らんとして、其色熟銅の如く、稍金光あり、
鑿鑿たる横雲の引はへたる間に沈みて、猶數道の金條を走らし、光の映
ずる所皆金色ならざるはなし、蒼穹を仰げは皆藍碧にして、星斗闌干た
り、忽ち列宿の間を抽出て、黒雲の天の央を蔽ふが如き者は、是果して雲
が果して山か、其圓錐の狀によりて、何人も直ちに富嶽たる事を覺れど
も、予輩が明旦を期して登臨せんとするには、餘りに高峻に過るを奈何

せん。
吉田は富士高原中大宮に次ぐの市邑にして、戸數優に四百を算すと
言ふ、町は急斜せる坂路を挿さむて設けられ、舊御師と稱する旅舎軒を列
ね、小菊刑部等最も著る。

予等は、大月の旅舎が指定する所に従ひて、小菊に投ずるに、疾く業に味
爽の登山準備をなすに、忙はしく、玄關の式臺を挾むて、定紋打つたる大
高張は掲げられぬ。
予等は、婢に導かれて一室に入り、衣を脱すれば、早く浴を報ず、此地夏時
は、連宵殆んど眠る事なく、浴槽の如きは、常に氤氳なる濛氣を充し、以て
客が不時の求めに具ふ。
予等は、浴止むて、氣爽かに、渾身の頗る輕さを覺え、仙の甚だ遠からざる
事を思ふて、相笑ふ。漸くにして、逆旅の小僮來り、明旦の準備を問ふ、曰

く合力曰く金剛杖曰く菅笠曰く力餅曰く行厨曰く防寒衣凡て小僮の言がまゝにし始めて枕を擁して一睡を貪る。夢未だ成らざるに婢等來り告げて曰く衆客業に發すと驚いて枕を蹴つて起ち時辰を檢すれば前七點なり爛たる煦光は早く淵戸を射つて、般紅燃ゆるが如し。

既にして擔夫虎吉來り自ら嚮導の任に當るといふ。蓋し此地の擔夫にして剛力と稱する輩は、大概職工者流に非ざれば農民なり曰く鍛冶工曰く木具職曰く鋸人と皆恒産と恒職とを有す、只盛夏登山の候に於てのみ賃錢の多きを貪ぼりて、一時翕然として剛力と變ずるなり、虎吉の如きも自ら指物職と稱す、技恐くは未だ堂に入ざるも、頻りに濫輿を究め得たるを誇り喋々として頻りに辨ず。予等試みに虎吉生の負ふ所の物を檢すれば曰く襦袍三枚山嶺の寒威

を防ぐなり曰く飯櫃三本日の誼飯に供するなり曰く草鞋十六足予等三人と虎吉生との用を辨ずるなり曰く力餅明旦の補食たり而して予等は各自に菅笠を戴き、薦の糸立と稱するものを纏ひ、金剛杖を杖つき、草鞋を引緊めて發す、其風丰頗る奇とすべし、若し東都に在りて此異装をなさんか、直ちに城北養病院中の人たらんのみ。

爪先上りの町を出て、左折する町許、右方に大華表の聳ゆるを見るものは、則ち富士嶽神社にして、俚俗淺間社と通稱するもの、木華開耶姫命を祀る。末社二十有餘、輪奐の美なしと雖も、社壇蒼古、神威の縹渺たるを覺ゆ。華表の上を仰ぎて、三國一の額を瞻るべし、謂ふ良恕法親王の筆にして、寛文十三年の秋、秋元但州の獻する所と、虎生予等の爲に語りて曰く、社は延暦年中の創建にして、元一小祠に過ぎざりしが、漸次修築して、一大社殿となると、今は、則ち縣社たり。

同人相顧みて先づ龍前に稽し頻りに山の恙なからん事を祈り或ひは懐紙を出して社印を請ひ終に繋りて社後に出づれば大樹森々たる所農夫の羸馬を繋ぐ者多し蒼蠅漸く多くして忽ち同人の腹背に蟬襲す森林中に繋げる羸馬は實に登山者の用を俟つ者にして荷車の如き登山馬車も又此處より發すといふ。

予等は前夜の強行と今曉の惰眠との爲に或ひは晝間山嶺に達する能はざるを虞ばかり馬を賃して之に騎す。値實に六十餘錢廉ならずと雖も鞍に凭つて鈴ヶ原三里の高原を顧盼しつゝ行くも亦快ならずや。鈴ヶ原は吉田より山麓馬返しに通ずる富士の裾野の總稱にして胎内窟も又其一隅に在り。而して檜杉森々たる富士ヶ嶽社脊の森林を出れば一望の注ぐ所綿渺として殆んど計る可らず目を遮るものは陸續たる白衣の行者のみ又一喬木の亭々たるものを望む可らず然れども

山地の常として綠草の離離たるもの其丈頗る高く唐王簪花の花穂の如きは伸びて馬腹に達せんとするものあり。往々にして道を没す。行く事里餘始めて中の茶屋なるものに達す巨大なる木華表ありて老松其邊に偃蹇し蒼黒の鱗を怒らし翠瑠の髻を揮ひて一陣の涼風に嘯く處氣爽かにして仙の益々近きを覺えしむ。

中の茶屋を辭して再び鞍に上る道益々狭くして鋸を促す可らず假令高原を徑して進まんとするも荆棘全く道を埋めて到底馬脚を投ず可らざるなり已を得ず衆人の蠢爾として行く者に尾し辛うじて馬返に達す。

馬返しは各登山路に必ず存在する關門にして何人と雖も茲に馬を捨ざる可らざるなり之より上は樹根狼藉として渴驥の潤に飲むが如く臥貌の岩を抱くが如く崛起縱横又馬に鞭つ可らず之を以て馬の客を

送りて此處に止まるもの、日々數百頭皆綠草の上に戯むれて下山の客を待つなり、凡そ馬の集る所、馱駝を見ざるなきに、富士獨之に反するは、必竟皆牝を用ふるを以てなり、女子と雖も、猶能く馱すべし。
 馬返しに茶店あり、温飩と力餅とを賣る、予等先づ就いて茶を呼び退いて一隅を占む、虎生足下の一礎石を指して曰く、此礎と箱根の絶頂と、高さに於て相如くと、遙かに一抹雲烟の所を指さす、甲山駿嶺、黝蒼として、只青螺の基布するが如きを見るのみ。
 馬返より上は、則ち蒼鬱たる大森林にして、垂蘿森々として、樹梢より垂れ風冷やかにして、氷の如し、衆皆洪爐中より放たれて、俄かに冷水中に投ぜられたるが如く、激活として生氣の生ずるを覺ゆ。
 爵擾漸く疎にして、始めて一合目に達す、定禪院の廢趾あり、殘礎苔蒸して、時に小二葉蘭の咲くを見る、幽意更に遂し。

途二合にして、小室淺間社あり、言ふ貞觀七年の創建にして、富士山に木華開耶姫命を勸請したる、嚆矢なりと、社殿漸く荒れたれども、猶雨漏を見るに至らず。
 凡そ人の富士に登るもの、始めは意氣頗る壯なれども、漸く二合に至るに及びて、口喘ぎ肝渴き、或ひは烈日に燬かれ、或ひは山氣に襲はれ、寒暑倏忽として、旋轉するを以て、大抵困憊し盡し、此社頭に稽して、俄に起つ能はざるものあり、然らざるも、祠畔の茶亭に憩ひて、心身の再び蘇するを待つを以て、雜沓頗る甚だし。偶々外客四五輩あり、各々婦人を携ふ、皆靴を蔽ふに草鞋を以てし、金剛杖を杖つき、擔夫に助けられて、漸く此處に來る、殊に婦人の如きは、左右に擔夫を杖とし、困頓として、氣息殆んど絶えんとするもの、如く、恰も惡筆の糊字の如し。虎生顰縮して曰く、明旦終に日天子の御來光を見る能はざる可し、洋人山嶺にあらば必

ず風雨生ず客等實に薄倖なりと予等の爲に弔辭を陳ぶるもの如し。
 外客にトムソン、ソフエーアあり自ら言ふ北米の産と口を極めて富士
 の壯觀を説き頗ぶる吾人の爲に氣を吐くもの如し。彼は實に比年
 盛夏の候に及べば必ず富士登山を試みざるはなしと然して今年新
 來の客を携へ、東洋第一の高處に登り、煦光の第一耀を見んと欲して來
 りたるもの不幸にして客徒歩に慣れず、山麓にして夙く奄々たり、懦弱
 蒲柳の輩又談ずるに足らずと、小僮を麾ねいて炭酸水を仰ふぎ、予等に
 獎めて氣餒頗ぶる昂し、紅毛綠眼の好漢又談ずるに堪えたり。
 予等一憩の後外客に辭して進む、四合の室に達して、濱梨の梅醬漬を味
 ふを得たり、濱梨なるものは、閩書の所謂越橘にして、和名こけももと呼
 ぶ高山植物の二なり、各地の高山隨處に生ぜざるはなし、高さ僅かに五
 七寸、簇々地に蔭して密生す、花は満天星の如く、實は紅玉に似たり、俚人

言ふ昔徐福の薬を尋ねて東海に遊ぶや、富嶽に遭ひて蓬萊山となし、不
 老不死の靈薬を求めて異人より此粒子を受け、終に止まつて歸らず、白
 髮童顔にして羽化し、山と共に壽しと。俚人は今も猶固く此説を信じ、
 越橘を以て富士の特産として誇るもの如し。
 四合を過ぎて老樹漸く疎に、灌木の丈を没するを見、岩嶽や車百合や、富
 士簷竿や、砂石の上を繡織して、高山の狀態始めて具はる。而して吾人
 は何時しか苦熱の煩悞を忘れ、漸く衣の薄きを覺ゆるなり。長く一所
 に佇立すれば、思はず戰慄を禁ずる能はざらしむ。
 虎生予等が爲に嚮導として前に在り、顧みて曰く、五合の室なりと、五合
 は實に富士の中腹にして、御鉢廻りなるものは、則ち此處より始めらる
 しなり、石に刻みて、天地之界といふ。
 嗚呼、天地の界、乾坤の間、實に恰好の名稱に非ずや、富士は實に蒼穹を支

ふるの主柱にして霹靂拗怒し、風雨洩激するも、宵漢の長へに墜ち來らざるものは、實に此天柱を有するが爲ならずとせず、同人相見て石標の處を股ぎ自ら天地を踏むと稱す、壯快言ふ可らず。

忽ちにして白氣あり、遙かに足下より起り、濛々として襲ひ來る、其形鬼の如く、馬の如く、或ひは蝶とちぎれ、或ひは花と飛ぶ、足柄の巔や、箱根の峯や、將又甲の連巒や、鏡の如き川口の湖や、見るく、濛霧の裡に閉され、冷風俄かに吹き來りて、垂羅の髮の如きもの、生命あるが如くに搖き、蕪蔓せる棒莽皆立つて舞はんとす、忽ちにして霧は雨となり、横様に人面を撲ちて過ぐ、蓋し山靈の吾人を戒めて、敬虔の念を失はざらしむるものか、須臾にして風大いに起りて、冷氣骨に徹し、心身共に凍らんとするに及び、始めて天日を雲端に仰ぐを得たり。白氣の遠く山巔に向つて走るものは、使命を果し了つて、山靈に告げんとするに非ずや、吾人始め

て蘇するの思ひあり。

五合より六合の間は、則ち山神の御花畑にして、百花の綸爛、衆芳の繽紛、山中第一と稱す、吾人没風流にして、土蠻一輩と擇ぶなきも、身を化して、蛇蝶と伍し、紅を穿ち、縁を尋ねて、飽く事を知らず、若し徐氏の此處に來りたるを果して、眞なりとせば、其歸るを忘れたるは、宜ならずとせず。

時に午下三點、日は灼々として、冲天にあれども、冷風倒に吹いて、暑熱甚だ高からず、時に影なく、形なきもの、氷の如き手を伸べて、倒に人面を撫て、過ぐるを覺ゆ、これ山峭か、果木魅か、覺えず、峭愴の氣に襲はれ、眉を顰めて、相顧みるのみ。

五合以上は、所謂躑躅山にして、砂礫磊砢として、道を埋み、熔岩礫柯として、前に横はる、而して道も漸く峻に、一步一喘、屢々氣息の逼迫するに會し、僅かに岩角を擁して、長大息を漏すのみ。時に雲漸く閉し、來りて、四顧

全く黝冥僅かに山嶺を仰ぐべし、龜岩の邊より寶永の嶺きに引きはへたる雲の橋の揺曳して去らざるを見るの外は、天地白濛々として全く人寰を望む可らず。

冷氣は彌が上に嚴しく森々として骨を刺すに至り額より流る汗は、氷よりも冷かにして不快極りなし漸く八合目に至り窖に入りて茗を啜る味甘露の如し言ふ千年の雪を溶解して作るものと果して屋後に水槽あり上に簀を布き大雪塊を載せて滴瀝するものを受く設備極めて簡略なれども古來幾多登山の客を救ひ得たるもの亦尊からずや。八合は實に富士山中に於ける都邑にして須走吉田兩道の合する所たり石窖十數戸麥酒あり珈琲あり設備能く備はる之れを以て大抵此處に投じ頂上に宿泊する者甚だ稀なりといふ。予等は今や足痠を氣餓を殆んど進むに力なけれども勉強して強ひて

起ち大氣の稀薄を病みて岑々たる頭顱を押へつゝ一意向上して進む漸くにして九合の窟に達し仰いて山嶺を咫尺の間に見るに及び忽ち白雪の菲菲として降り來るに會す時は炎暑熾くが如き三伏の候にして袖打ち拂ふ雪の夕暮を見る奇も亦甚だし窖に一神祠あり神官予等の爲に説いて曰ふ再昨薄暮雪俄かに降り寒威凌ぐ可らず偶々學生の此處に來る者誤つて道を失し終に凍死せんとしたるを擔夫等此處に擔げ來り僅かに蘇せしむるを得たり客の座する處の石は實に學生の横はりし處なりと猶予等の爲に富嶽の景觀を説き一々指點して語る然も下方は雲漠々として全く望見す可らず。

一銅錢を神前に捧げて窈かに山靈の爲に苞苴となし拜辭して窖を出づれば寒風凜烈として四肢皆氷んとす然すて暗然たる暮色は全く乾坤の間を封し僅かに月光の烟霧を穿ちて仄白く輝やくを見る此時紅

鹿島丈の都市の此世に存在すべしとは實に何人も思ひ泛ばぬ所にし
 て、只太古逸實の原人に歸したるが如き思ひあり。姦に至りて誰か黃
 金の價值ある事を思はんや、譬へ千萬の財を積む共富士山上に於ては、
 簇々たる熔岩と選ぶなきなり。
 所謂胸突八丁なるものは、未だ甚だしく峻嶮ならずとするも、困憊の餘
 此處に來りて、俄かに勾配の急峻なるに會し、爲に氣を吞まれて、足趾の
 更に重きを覺ゆるなり。同儕皆困頓し、瘡痛堪ゆ可らず、顔面蒼白、朱唇
 皆紫なり、既に山嶺を望み、石窖の旗幟の紅白を辨じながら、然も邁進す
 る能はず、齒を噛み息を促しつゝ、僅かに蝸牛の匍行を學び、蹠々僣れん
 とす。偶々飛禽あり、大さ雀の如く、其聲裂帛に似たり、山嶺より翔翔し
 來り、手等を掠めて過ぐ、其形を熟視する能はざれども、海拔一萬餘尺の
 高所に去來する鳥は多く、之を聞かず、或ひは山神の御使女なるものに

非ずやと徐に敬虔の念を生ぜしむ。
 午後七時、辛ふじて山嶺に達し、久須志神社の前に著す、社は岩窟により
 て棟梁を施したるもの元より、輪奐の美を期す可らず、社頭に禰宜あり、
 予等の爲に頂上の印を捺して紀念となさしむ。
 社の側らに石窖五六あり、所謂舊時のお救ひ小舎なるものにして、往時
 は山嶺に宿泊するもの甚だ稀に、風雨に際して一時身を安んずるの處
 たり、故に此稱ありといふ、而して現時も山上に宿泊するものは甚だ少
 なく、僅かに一窖三四の客を贏ち得たるのみ、其多くは實に八合目に止
 まれるなり。
 時に寒威漸く加はり、凛烈人に迫り、天風の颯々たるもの、横様に毛髪を
 吹いて、細霧氷よりも冷やかなり、同人皆掌を口に當て、僅かに暖を取り
 つゝ、漸く石窖に入る。

害の主、人齡五十有餘、朴訥愛すべし、予等の爲に先づ火を焚いて之を爨す、自ら言ふ客を饗するの具、只此薪あるのみと圖らざりき、盛夏三伏の候、火を擁して暖を取らんとは、思ふ今や下裳俗塵中に齷齪たる徒輩は、恐らくは予等の現狀を夢想する事だも能はず、頻りに苦熱に懊惱せん事知るべきのみと、相見て意氣頗ぶる壯なり。

業にして害主食の成るを告ぐ、味噌汁と乾魚とを添ふ、共に食ふに堪えざれども、汁と飯との暖さを以て喜んで、數椀を夷し、而して後始めて盃を擧ぐ、予等携ふる所の鐘詰類、又好下物ならずとせず、同人皆陶然として、酔ひ草鞋を枕にして眠る、敷くに蓆無く、僅かに板を列ねたるのみにして、蔭薄き事紙の如くなれば、宛ら石上に横はるに似て、俄かに夢を結び難し。

燃え捨の火は光頗る弱く、餘炎冢迷し、淡々として害内に立て置めたる

に、一穗の短葉夢よりも淡く、板戸漏る寒風に明滅して、幾度か揺めき宛ら影の如き者ありて、窈かに蒼白き息にて吹消さんとするかと覺え、懐愴の氣沈々として充つ。

時に滴々たる怪しき音の斷續しつゝ、聞ゆるは雪より垂るゝ點平にし、て今や漸く氷んとする者の如く、其音頗ぶる急ならず。窈かに枕を欹つれば、同人皆眠れり、而して虎生と害主と相前後して横はりぬ、軒聲低くして、晰かならず、問々夢に壓はれて、嚙語人を驚かす。

予は終に眠る能はず、則ち枕を推して起ち、靜かに虎生の上を跨て、戸口に至れば、天颯頻りに吼えて、戸は將に破れんとし、容易に開く可らず、僅かに寸許を排し得て、恐るゝ戸外を覗へば、濛々たる白雲は綿を以て蔽ひたるが如くに推だかく、月光濛朧として、天空皆白し。忽ちにして一陣の風、瑟瑟の音を發して、さしもの山嶺も崩るゝ、斗りに吹き起れば、

渺茫たる雲海は俄かに澎湃たる波浪を上げ雲は雲と相搏ち絮は絮と
 亂れ砕けて猪子となり奔馬となり猿躍する者鳥翔する者皆靈ありて
 動くに似たり忽ちにして爵擾たる一大雲陣は寶永の一角に湧出し幾
 度か旋渦したるよと見る間に一翁一闢俄然として神龍の形と現じ慕
 然として山巔を望んで走り來る勢ひ矢より疾く戸を閉して回避せん
 とするに能はず死灰の如き冷氣は手が面を掠めて燈火は終に奪はれ
 ぬ。窻内の餘炎は爲に再び燃えんとしたれど又忽ち滅し咫尺を辨ず
 る能はず漸くにして藁を搜り再び枕に伏す。窻外の風は益々急にし
 て奇礫の轟發を聞くが如く山鳴り石吼え石窟も終に碎けんとするが
 如し。

既にして困憊漸く侵し來りて予は終に眠りぬ夢未だ全からざるに窻
 主早くも予等と呼びて曰く日輪の初出を拜するは今なり然れども天
 候甚だ好望ならず終に徒勞に屬せんのみと虎生も又曰く昨縁眼奴來
 る天意怒りを含む知るべきのみと自家の豫言の中れるを誇るに似た
 り。

窻主和して曰く外人五七輩昨夜八點隣窟に著するを見たり。番に外
 人のみにして猶山神の怒に觸る況んや婦人を携ふるをや彼等に過誤
 勿らしむれば幸ひのみと時に同儕皆結束せり虎生も已むを得ずして
 跟ふ予獨起たず猶蓐中にありて央夢裡を辿るのみ首を振りて行を肯
 ぜす蓋し黎明の朔風を恐るゝに因るのみ。

頃刻にして同儕皆歸り來り戰慄しつゝ火を擁していふ。絶望のみ窟
 を出づる一步直ちに吹倒されんとす危い哉と窻主と虎生と交も山巔
 の暴風を語り。又神鼠の事を説く。

神鼠とは何ぞや山巔の甘口鼠なり言ふ山巔の石窟に奇獸あり鼠族に

して其丈僅に二三寸日中温暖の時出て爐邊を嬉遊し敢て人を畏れず、
 餌を與ふれば喜んで食ふ既にして黄昏冷風一過するに及べば皆其巢
 窟に潜入し死したるが如くに動かず人あり試みに之を爐邊に拉し來
 り火氣を與ふれば蠢爾として再び匍行す冬期は害主の遺留したる殘
 米によりて饑えを凌ぎ以て夏の至るを俟つと虎吉も又側らより之を
 證す然れども果して然るや否やを知らず。
 害に醴酒あり所謂三國一の甘酒なるもの千古不滅の雪を碎いて煮る、
 之を味ふに甚だ美ならざれども温度口に適ふを以て爲に氣力を昂進
 せしむるの思ひあり同儕皆數碗を傾け而して後朝食を執る汁は餅を
 投じて所謂味噌雑煮を作りたるもの特に鶏卵を添ふ。虎生飽食已む
 事を知らず猶米飯の中央粥に近きもの四五碗を代え始めて烟を吸ふを
 見る健啖賞すべし。これ新羅三郎陣中の傑物なり。

午前七時風力僅かに減ずるを覺え噴火口を見んと欲して始めて害外
 に出づ洋装の上に襦袢を纏ひ頭を蔽ふに巾を以てし防風壁に添ふて
 徐行す若し誤つて首を擡げんか渾激せる天風は直ちに頭顱を奪ひ去
 らんとし衆畏れて全く地に伏し終に膝行しつゝ漸く久須志が岳の麓
 に到り天拜臺の下に行きて遙かに噴火口を望まんとすれば白雲濛味
 として湧き泰々として騰り只烟の昏迷を臨み綿の混沌を見るのみ天
 門や帝座や靈水の湧く所や全く見可らず虎生巖罅に身を潜め模糊
 中を指點していふ。山嶺噴火口を廻りて八采の蓮峯あり成就が岳伊
 豆が岳久須志が岳白山岳劔が峯三島岳最も著る就中劔ヶ峯は其最高
 所にして野中氏の觀測所を創立したる所白山岳は高さに於て之に次
 ぐと指示頗る力む然れども瞑烟四合咫尺を辨ぜず空しく踵を廻らし
 て石窟に歸り始めて隣害の中央氣象臺觀測所たるを知り所員に就い

て天候を問へば昨夜來の天候は只局部低氣壓の異動のみ山を降りて六七合に至れば則ち依然として晴天ならんのみと意に介する所なし同儕始めて安意し辭して害に歸らんとすれば隣害の外客は早く已に結束して今や下山の途に就かんとしつゝあり昨二合にして予と語りたるトムソン、ソフエーアも又加はれり予を見て手を握り堅く振り動かして曰く「サヨナラ」と邦語頗ぶる拙なり予笑つて彼を送り語るに天風の爲に誤つ勿らん事を以てし再び害に歸れば虎生迎へて曰く「縁眼奴去る知るべし須臾にして晴れん事」と言未だ終らず果して濃雲漸く薄れて遙かに銀漿を湛えたるが如き三日月の池を雲烟渺茫の間に描き來る池は則ち山中の湖にして周回三里十二丁と稱すれども遙かに之を望めば只一瀟水に過ぎざるのみ。忽ちにして雲中に一大飛鏡あり其色銀の如きもの直ちに變じて渥丹

の如く金盤の如く又忽ちにして紫晶を琢くが如く、五彩旋變窮極する所を知らざるものは瞳々たる旭日の雲の爲に旋翻せられて其色を遞變するなり講詭變幻奇異錯出應接に遑あらず倪董の筆と雖も此壯觀を奈何ともする能はざるなり假令成就が岳の温谷に日出の偉觀を拜し得たりとするも終に此詭變の偉觀に如く能はざらんと同儕皆恍然と酔へるが如く饒舌予の如き者も終に一言を發する事能はず只啞者の如く聲なくして指さすのみ。虎生後より呼んで曰く「今や風力僅かに和す然も一時の現象なるやを保せず其再び怒號せざるに乗じ早く八合の害に至らん九合の邊氷雪坂上を横斷する一路あり風力餘威を逞しうすれば危険測る可らずと則ち害主に辭して下る隣害の主人虎吉を呼んで曰く「請ふ客を飛ばす勿れと虎生言なくして首肯し予等を嚮導して下る風威減ずると雖も

猶屢々急驟の襲來するあり幾度か滾躑せんとして僅かに金剛杖に助
けられ漸く氷雪坂上に抵る。

坂路は山皺疊障の間を貫ぬきて匹練を掣曳するが如く皎々として白
銀を濯ぐに似たり仰いて直ちに山巔と語るべく俯して窮極する所を
知らず若し誤つて茲に躑躑せんか忽ち彈丸黒子を抛擲したるが如く
未だ粉盪せざるに骨肉忽ち鎖磨し盡すべし虎生予等を顧み幾度か注
意しつゝ自己の足趾を踏ましむ予等皆戰々競々憚々焉として横斷し
過ぎ始めて氣を舒べ臥牛の如き火山岩に凭りて願盼す有名なる須走
は實に此處より始まるなり。

時に果して測候所員の言の如く山巔は猶風伯鏘然として疾舒圖る可
らず蹙坎聲響の音を聞け共下瞰は全く晴朗にして砂道透漚として開
け連縷の環抱するもの一々其聯接を明かにすべく秀荷明媚宛も美人

の眉に似たり。湛然として鏡面の如きは山中の湖にして奇嶮峻固な
るは御坂嶺に非ずや突嶽峭拔なるは駒ヶ嶽に非ずや一條の素練を掣
きたるが如きは吉田の驛なり青絨を展べたるが如きは馬返の森林な
り鈴ヶ原遠く盤亘し中にノへの黒子を見るものは中の茶屋の大華表
なり胎内窟の旗幟なり榛莽の蒙密篆烟の低曳皆盎然として見るべし。

漸くにして衆烟を捨てゝ起ち始めて須走の奇降を試む砂礫疎鬆輕き
事雪の如く踏めば則ち踵を没し没する毎に數尺を下る一度足を擧ぐ
れば忽ち丈餘を走り走る事益々疾くして行歩飛ぶが如く僅かに鞋襪
を結束するのみにして同儕に遅るゝ事十數町只物ありて後より押す
が如く壯快極まる所を知らず一氣直下して五合目に至り再び御花畑
を徜徉して終に馬返しに至れば苦熱燃ゆるが如く洪爐も雷ならず凡
骨終に登仙する能はずして再び塵界齟齬の人となり仰いて山の彌々

やま奥附

著者雅所



明治四拾年七月十二日印刷
明治四拾年七月廿一日發行

實價金壹圓五拾錢

著者 志村 寛

著者 前田 次郎

發行者 太田 信義

印刷者 石川 金太郎

印刷所 株式會社 秀英 舍

發行所 橋南 堂

東京市日本橋區吳服町十一番地
電話一八三四 (振替五〇三九番)
本局

崇るを想ふのみ。

(をばり)

やま
終

文の美と花の芳とを併せて文學と科學とを調和し得たる者尤然
 たる大冊子は居ながらにして鬱氣彷彿たる紫微の絶巔を座間に
 旁午の山水として高山植物唯一の記載書とし隨筆として其記事は著者多年
 頭の山と出たるものなれば由來難關を以て目されたる高山草の
 の實験に出たるものなれば由來難關を以て目されたる高山草の
 物の栽培を解釋し得べく一面に畫家意匠家工藝者の爲に山草の
 摸本たるべし

前田曙山 著述

口畫 插畫 齋崎英朋寫生

高山植物叢書

▲東京朝日新聞 日本橋吳服町橋南堂の豫約出
 版にて前田曙山著なる同叢書は今回第一巻を出版せり
 著者は多年山草の蒐集に従事したる經驗に文學趣味を
 加へて産地性質等を解説し一々培養の秘訣をも指示し
 たり口畫は珍草の原色寫眞數葉にて其真を示し用紙表

裝等特に未曾有の材料を用ひて優雅を極む
 ▲日本 豫約叢集中なりし曙山氏の高山植物叢書
 は愈々今回第一巻を出せり繪畫に云ふ著者曩に園藝文
 庫を著して以來類似の書非常に夥く見えたり而して今
 回も其先驅たれば斯界の爲め即ち幸なりと以て著者の

原色版口畫
 四十葉挿圖
 約三百個用
 紙ラツフ紙
 脊皮神代杉
 表紙輕金屬
 金具止
 全拾卷一冊
 金壹圓郵稅
 金六錢洋裝
 頗美本第壹
 卷既刊卷貳
 七月發行

抱負を察ふるに足る可し今仔細に本書を點検するに植物毎に學術附録に植物學的記載を挿入したるは一目瞭然直に其要領を得るを以て斯學研究者に取りても重寶なる可し次に本文は著者の最も力を注ぎたる處にして斯學者以外には無味乾燥なる植物學を優美に將可憐に書き出し全然文學に全化せしめ斯學に興味なき者をして一卷二百頁知らずの間に讀了せしむるは著者の手腕と稱す可し殊に本書は比較的に植物上の神話的見解最も多きを以て植物的神話叢書と云ふも亦可なり而て一植物毎の挿畫は實物は寫生的にもなれば本文と相對照して大に參考に資す可し殊に巻頭を飾れる數葉の三色刷は眞に實物を見ると異ならず又紙質は雅致に富みラッフェーパーを用ひ表紙は神代杉にロソア草の背を付け且つ表裏の角に金具を加へたるなど用意致り盡せりと云ふ可く一本以て書架を飾るに足らん扱て本書の記事は月隱升麻、椋葉草、高根葉、得撫草、君影草、車百合、大櫻草、白馬淺葱、岩藪、駒草、羽衣草、立山靱草、深山鶴、天靈絨蘭、高根金鳳華、白山一夏草、岩車、黃花駒の爪、獲取草、深山万年草、黃花叢草、深山鉄形、姫鉄形、當藥龍膽の珍植物二十四を收めたり

興味あり殊に氏の筆は能く是等植物を紹介するに詩趣を以てし文章の妙を極む試みに其一章を引かんか月隱升麻を紹介するに劈頭先づ曰「神劍背腹を削り鬼斧蟻窟を碎き翠巖嶽々として聲絡し山氣晴愴として人を侵すものは月隱の靈山なり」又羽衣草の條に曰く「霓裳羽衣の舞の袖翻として天津乙女の奏づるにも似たる其葉形は茲に羽衣の名を贏ち得て山草中の稀品として重宝する殊に單爲生殖を恣まにして他の體型が陰陽和合の理と同じからずこれ仙に非らずんば則ち神か傳へ言ふ天裔の人間に落ちたるもの所謂顯仙とは是か一圓藝に志あるの士は勿論さなくとも此書に依つて文學上の趣味を擲し得べし釘裝の美紙質の良は致して茲に云はず

▲山陽新報 曾て園藝文庫を編纂して今日園藝界の起源を開いたのは此著者である此人は植物學者ではないが園藝には色々趣味を持つた人で高山に昇り其植物を採集して自庭に培養を試み其經驗より結果を此書に發したるものである其出來たる花や葉も奇麗に圖に示しありて讀者も覺へず其趣味を感ずるに至る愉快な書物である

▲報知新聞 高山植物の研究は最近の流行にして其範圍さへ確定せざる程なれば之に關する著書の如きは晨星の如く斯學に志す者其津筏を得るに苦みしが先年園藝文庫を發して科學と文學とを調和し園藝思想の普及に偉功を發したる晴山氏今回本書を發刊せし

は克く時代の要求に投ぜしものと云ふべし氏の文章の流麗なるも其植物に關する學說と傳説とに該博なるは世既に定評あり本書月隱升麻より當藥龍膽に至る廿四種の山草に就て詳密なる解説を試みたり製本は神代杉表紙の破天荒なる挿畫の鮮麗なるに加へて用紙はラッフェーパーの舶來紙を用ひたれば近來稀れに見るの美本なり

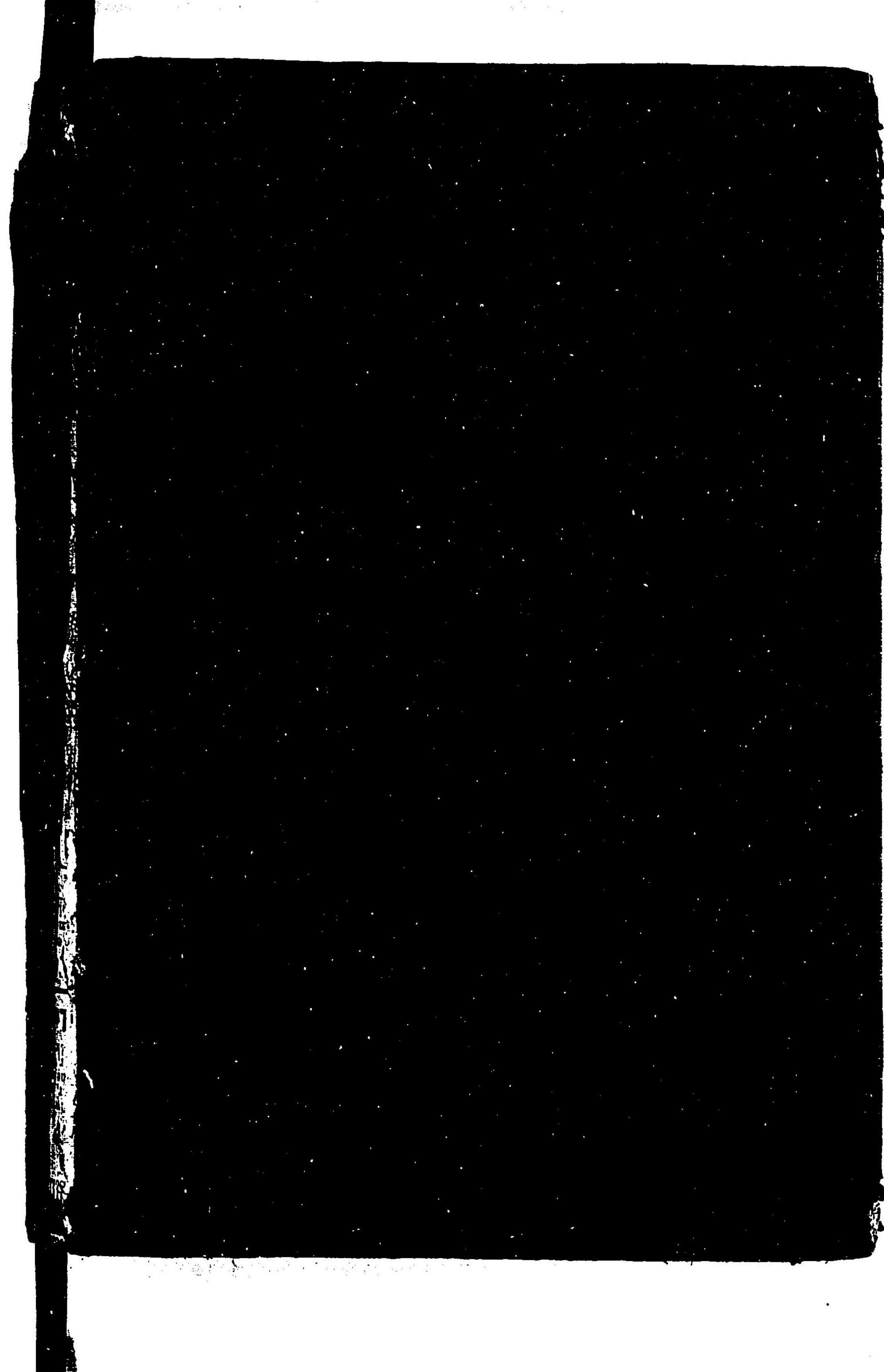
▲實業の日本 曾て豫約集したる大部中の第一卷なり月隱升麻以下二十四の高山植物を收む著者は園藝家にして文學者たる前田晴山氏「文學と科學との趣味を調和し索々織を織むが如き無趣味の科學をして讀て面白く知らず、此趣味を普及せんとしたるものなり周圍の狀態を説き植物と其性質栽培法等を説き其變遷と傳説とを掲げ詩歌を挿み古人の句を引用し而して之を行はるに雄勁の筆體麗の文を以てす期々として誦すべし例へば月隱升麻を説くに「花は滄紫にし淡き事水の如く六出にして寸を出ず點々として葉梗の間より垂下し、殘雪を擲ひて深き事珠の如し其掌大の葉は俯ま花の爲に蓋となりて雨を浸さぬとなりて風を防ぎ撫育培養して能く天然の麗質を保たしむ」と云ふが如し高山植物の人の注意を逸する久しく、而して今晴山氏に依つて遺憾なく其特長を發揮せらるる巻頭四葉の原色版挿畫は歴々として實物に接するの感あり裝釘又頗る高尚

此際第一卷より取揃御
註文に限り特に割引す

發行所
東京日本
橋吳服町
橋南堂

弊店發行の書籍は全國
各賣捌店にあり
萬一品切の
際は直接發行所へ申込
れたし

B1
B76



31
376

023147-000-6

31-376

やま

志村 寛/著

M40

ADB-1179

